

賃労働者の範疇的把握（中）

——マルクスの「商品人間」の自己意識に限定して——

梯 明 秀

は し が き

- 一、手稿断片「ヘーゲル弁証法批判」におけるマルクスの方法論的意図
- 二、マルクスの「徹底した自然主義」と、そのための彼の外在化の論理
- 三、『資本論』第四章における法的人格の自己意識の論理構造―（以上前号）
- 四、本来的な自己意識としての「自己活動的な生命」的自己関係
- 五、欲望の人間の生産的労働者としての種属的自覚における論理構造
- 六、労働市場における賃労働者の貨幣による欲望的自己疎外
- 七、賃労働者の「単なる商品人間」としてのヘーゲルの自己意識―（以上本号）
- 八、自己意識の構造における「商品人間」と「労働人間」と差異―（以下次号）
- 九、「商品人間」と「労働人間」との統一としての現実的賃労働者の向自性
- 一〇、現実的賃労働者の自己矛盾の外在化における経済学の対象性の定立

四、本来的な自己意識としての「自己活動的な生命」的自己関係

労働市場におけるかぎりの賃労働者の、すなわち「単なる商品人間」の、自己意識の論理構造が、経済的に不

自由であるにかかわらず法律的に自由であるという面において問題にされるならば、ヘーゲルの説く自己意識の論理構造と一致する、というのが前節の結論であつた。すなわち、法的人格としては、賃労働者も資本家と平等にあるのであつて、その自己意識の論理構造は、階級関係を越えて市民社会の一員としてのすべての商品所有者に共通するのであるが、それがヘーゲルの自己意識のそれに一致するのは、賃労働者の定有的実在としての労働力の販売、したがつて、それによる貨幣の獲得にたいして、経済的に不自由なるがゆえに、これを、ただ可能性として表象するだけの意識から、向自的に反省するかぎりでの自己意識にとどまり、したがつて、この自己意識が観念論的なものになるほかなかつたということに拠るのであつた。

しかしながら、「単なる商品人間」の自己意識についてのマルクスの規定は、かかる法的人格の向自的な構造だけにかぎられるばあい、それが、一面的であることには、問題はないであらう。なぜなら、法的人格として法律的に自由であるかぎりでは、向自的自己意識の論理構造をそなえることができたのであるが、それだけでなく、同時に、経済的に不自由なる面において、いな、これらの自由、不自由の両面の統一において見れるばあいの、その自己矛盾の体験における向自的自己意識の論理構造こそが、マルクスの「商品人間」にたいして与えた具体的な規定であるはずであるからである。そこで、この具体的なマルクスの規定を理解するために、われわれは、この残されている他の面についての吟味を試みておかねばならぬわけである。そして、このことは、「単なる商品人間」の向自的構造について、そして、さしあたりまず、その定有的実在性の面、彼の自己意識の直接的な意識の面、いまだ止揚されざる外在性、すなわち疎外の状態の面について、論理的な分析を試みることになるのであるが、しかし、このことへの分析は、前節において、マルクス自身のヘーゲル批判として、われわれの

理解してきたところのものを、前提としなければならぬことは、以下に述べるとおりである。

すなわちマルクスは、『経哲手稿』の「哲学的断片」において、自己意識の論理的構造に本来的な契機、すなわち、「他者そのものにおいて自己自身のもとにある」という契機について、ヘーゲルの観念論的な秘密を曝露していることは、前にも述べておいたとおりであるが、それは、この他者が意識の外の感性的対象でなくて、意識の内におけるこの対象の表象ないし知識にすぎず、その内容の仮象性、空無性にかかわらず、感性、現実性、生命を借称している、ということの指摘であった。また、そのかぎりで、この表象として意識されただけの外的対象は、意識にたいして肯定的であり、意識そのものであり、むしろ自己意識の対象化され、外在化されたものにすぎず、この自己疎外としての否定性も意識内だけの抽象性にあるほかない、ということの指摘であった。ところで、このさい、マルクスは、前にも引用したところであるが、つぎのごとく、いつているのである。

——A、「意識が如何ようにあり、そして意識にたいして或るものが如何ようにあるかの様式は、知識 Wissen である。知識は、意識の唯一の行為である。だから、或るものは、意識がこの或るものを知るかぎりだけで、意識にたいして生成してくる。したがって、知識は、意識の唯一の对象的態度である。」(「ヘーゲル批判」S. 87, p. 159-60, 四二三頁)——

* (「ヘーゲル批判」S. ……、p. ……、頁)は、「ヘーゲルの弁証法ならびに哲学一般の批判」Kritik der Hegelschen Dialektik und Philosophie überhaupt, 略記の略、Die Heilige Familie und Andere philosophische Frühschriften, Dietz Verlag, その英訳版 Economic and Philosophic Manuscripts of 1844, Moscow, 1945, p. 11. エン選集(大月版)補巻、4、のそれぞれの頁数であり、以下これにしたがう。

なお、前出「ヘーゲル批判」以外の手稿は、「私有財産と共産主義」S. ……、p. ……、頁)という具合に略記する。

そのばあいでドイツ語版のみは、Kleine ökonomische Schriften, Dietz Verlag, 1949。

この「意識の唯一の行為であり、対象的態度」であるところの「知識は、じじつ、それが対象に関係することによってのみ、自己の外にあり、自己を外在化している」のであるが、このことは、しかしながらヘーゲルにあっては、「知識そのものが対象としてのみ自己に現象する」ということから、さらに、「対象として知識に現象するものが、知識自身にすぎない」(ibid. s. 88, p. 160, 四二三頁)ということになってしまい、そして、このことと自己意識に知識自身の確信が成立すると説かれているわけである。いいかえれば、知識そのものでしかない対象の現象を否定することによって、すなわち、この否定の否定によって、知識としての対象の本質を肯定する、という自己意識的な論証だけにおいて、知識は、「外的対象のもとにあって、なお同時に自己自身でもある」と、ヘーゲルは説いているのであった。

これにたいして、フォイエルバッハが、この否定の否定による絶対肯定なる弁証法を斥けて、「感性的に確実な、自分自身のうえに基礎をおいた直接的な肯定を、対置した」(ibid. s. 76, p. 146, 三九八頁)ことについても、われわれは前述してきた。要するに、このヘーゲルの弁証法は、知識自身の勝手な自己肯定、自己確証にすぎず、自分の外に現実的对象を対立者として残しているから、「自分の定有的実在によって、自分自身を証明もしていなければ、保証もしていないところの、自己肯定」であり、したがって、知識は、むしろ「自分自身について懷疑している」(ibid. s. 76, p. 146, 三九八頁)というべきであると、彼はヘーゲルを批判したわけである。そして、このようなヘーゲル批判の成就されえたフォイエルバッハの立場において、さらに、ヘーゲルの否定の否定という弁証法を唯物論化して継承したのが、マルクスであったことについても、すでに、われわれの知っているところ

ろである。すなわち、これもすでに引用したところであるが、彼は、フォイエルバッハとともに、主張する。

——C、「人間は、直接的には自然存在である。自然存在として、生命のある自然存在として、人間は、一方において、自然的な諸力をそなえ、生命諸力をそなえた一個の活動的な自然存在である。これらの諸力は、人間にあつては、素質、能力、本能として実在している。人間は、他方において、自然的な、身体的な、感性的な、対象的な存在として、動物や植物と同じく、一個の受苦的な、制約をうけた、制限された存在である。すなわち、彼の本能の諸対象は、彼の外部に、彼から独立している諸対象として実存している。しかし、これらの諸対象は、彼の欲望の対象であつて、彼の生命諸力を働かせ実証するのに欠くことのできない本質的な対象である。人間が、身体的な、自然的な、生きた現実的な、感性的な、対象的な存在であるということは、人間が現実的な感性的な諸対象を、彼の存在の対象として、彼の生命発現の対象として、もっているということをや、いみする。……たとえば、飢えは、身体の外部に存在するところの、身体の保全と生命の発現とのためになくてはならない対象への、身体的対象的欲望である。」(Ibid. s. 83, p. 156f. 四〇九頁)——

このマルクスの言葉は、人間の主体的な生命力、本能、欲望などが、それを外から制約する対象によって、直接的に確証されている、ということの主張をいみしている。そして、この主張は、フォイエルバッハの「積極的に自己自身のうえに基礎をおいたところの、感性的に確実な、直接的な自己肯定」という立場にたったかぎりのものであることは、あきらかである。ただ、このばあいに、注意しておくべきことは、この立場にたったときに、われわれ人間の意識の外的対象への態度なるものは、もはや、右の引用(A)に述べられてあるところの、知識、判断、思惟などの理論的行為ではなくて、それ以前の、直接的な意識の態度としての、生命力発現のための素質、

能力、本能などになる身体的行為に、すなわち欲望的態度に、問題の焦点が推移している、ということである。右のマルクスの文章（C）をここで再び引用するのも、読者に、この点の注意をうながすためであった。しかも、このことの理解を確実なものにしておくために、さらに、いもひとつ、つぎの言葉を新たに引用することを吝むべきでないであろう。すなわちマルクスは、第三手稿「私有財産と共産主義」のところで、述べている。

——B「フョイエルバッハの主張するのとおり、感性は、すべての科学の基礎でなければならぬ。ただ、科学が、感性的な意識と感性的な欲望との二重の形態において、出発するときだけに、——すなわち、ただ科学が、自然から出発するときだけに、——それは、現実的な科学である。人間が感性的な意識の対象となり、そして、人間としての人間の欲望が、（現実の）欲望となるためには、いっさいの歴史は、その発展のための準備の歴史である。歴史自体が、自然史の、人間への自然の生成の、現実的な部分である。人間についての科学が、自然科学を自らのもとに包括するように、自然科学は、やがてまた、人間についての科学を自らのもとに包括するであろう。すなわち、両者は一つとなるであろう。」（「私有財産と共産主義」S. 137, p. 111. 三五四頁）——

この言葉には、マルクスが、フョイエルバッハの立場に立ちながら、さらに、フョイエルバッハを超えている点、いかえれば後に述べるつもりであるが、自然自体の向自的な自己関係として、ヘーゲルの否定の否定の弁証法を継承している点が、原理として前提されており、それが彼の科学論の形態で主張されているのであるが、ここでは、「自然史の人間への生成」という「物質の現象学」の構想を表現するところの、この科学論の重要性に惹かれることなく、われわれは、さしあたって、当面している問題を説明するための緒口が、この言葉において示されていることに、まず注目しなければならないのである。それは、われわれ人間の感性に二義のあること、

意識としての感性的態度と欲望としての感性的態度との区別が人間にあること、このことについてのマルクスの規定に注目しなければならない、というのである。ここに、意識としての感性的態度、あるいは「感性的な意識」とは、まえに引用した（A）における「意識の唯一の对象的態度が知識である」という規定と関連する、というよりも、むしろ、この規定と同一である。とするならば、そして、欲望もまた意識であるかぎりでは、感性的意識には、知識と欲望との二つの区別、さるべき形態があり、われわれ人間の对象的態度には、感性的知識と感性的欲望との二つがあつて、（A）におけるごとく「知識的態度が唯一の对象的態度である」というだけでは一面的であつて、ただしくは、この規定は同一の对象的態度の一つの契機にすぎなかつたことになる。したがつて、引用（A）のみによつてマルクスを理解するとすれば、われわれは一面的な抽象性におちいることになるわけであるから、ここに、引用（C）の言葉に、あえて読者の注意をむけておかないわけにゆかないのである。

マルクスとしても、ヘーゲルの弁証法批判としては、自己意識についてのヘーゲルの觀念論的把握にたいする批判としては、意識の对象的態度なるものの強調を、さしあつて、いな窮極的にも、感性的知識に限定するはなかつたわけである。なぜなら、ヘーゲルの弁証法は、ただに『論理学』において純粹思维の自己展開の論理であつただけでなく、意識の経験の学としての『精神現象学』においても、この純粹思维の立場を予想し、この立場を基礎づけることが意図されているかぎりの弁証法であることによるのである。すなわち、この『精神現象学』なるものは、人間の意識が経験するあらゆる外的対象との対立、矛盾を、思弁的に意識のうちには止揚して克服してゆき、最後に到達する絶対的自我ないし絶対知において、これらの対立、矛盾のすべての形態を相対的なもの、過度的、一時的なるもの、たんに現象的なもの、すなわち仮象であつたと、自己認識するだけの、い

いかえれば、われわれの感性的知識から絶対知識にいたるまでの——そのかぎりで、知識の世界から現実の生き、感覚を排除してゆくという——認識論的な自己発展の歴史を、叙述した学問にとどまるからである。すなわち、この学的体系においては、マルクスも指摘しているように、外的対象とは、この対象の知識にすぎず、これと意識そのものとの二元論が、外的対象そのものと意識との二元論に、すりかえられているわけで、ヘーゲルにおいてこそ、「意識の唯一の対象的態度が知識である」という規定が、本質的なこととなる。しかしながら、マルクスのヘーゲル弁証法批判において、彼が積極的に自分の立場を主張する面としては、意識の対象的態度をば、引用(A)においてのように、知識に限定せず、欲望ないし生命こそが、その直接的なものであると、彼は規定していたというふうに、われわれは見るべきである。

それにしても、『精神現象学』が、対象からまったく離れた抽象的な意識だけの発展史的叙述でなく、それが同時に、意識の対象の発展——たとえ、それが意識内における対象の知識の自己否定的な発展ではあるにしても——の史的叙述でもある、という二重性をもつ具体的な、現実的な学であるかぎりでは、したがって、すくなくとも、われわれ人間意識の経験しうべき、外的のみならず内的にも経験しうべき、いっさいの諸対象が知識として把握されているかぎりの著作としては、媒介的にあるにしても、欲望的感觉ないし生命的活動についての叙述が、そこに欠けているということは、とうてい考えられないはずであろう。事実として、この『精神現象学』の叙述は、「感覺的確信」から「知覚」をへて「悟性」にいたるまで自己展開してくる意識の段階では、外的対象についての認識論にとどまっているのであるが、さらに「自己意識」の段階にすすむとき、意識の対象は二重化され、外的対象のほかに意識自体が意識の対象として現れることになる。すなわち、「意識」の段階において、

認識主観は、普遍的な客観性の立場から客体的な対象の自己運動を解明してゆくうちに、悟性がその感性的現象の背後に超感性的な本質を認識するにおよんで、この対象の本質が悟性の働きと一致すること、いいかえれば、知覚として経験した主観と客体との対立が、本質と悟性との同一性に転化することを知って、認識する主観自体を反省して、自己自身を自己のうちに対象として意識することになり、かくて、個別的な主体性の立場になつてゐることに氣づくのであるが、これが、「自己意識」の段階である。この立場の転換は、たんに理論的であつた意識が、自ら主体的に活動するという実践的意識へと、自らの立場を具体化することを、いみするであろう。そして、この「自己意識」の段階で、意識の内的対象となる最初のものが、まさに生命的自己なのである。ところで、この生命的自己が自己意識のうちに対象として現れてくる論理的過程は、その成果が「自己意識ある自己活動的な生命的自我」として、「自己意識ある自己活動的な商品人間」の本来の姿——いまだ疎外状態におちいらぬ以前の本来の姿——であるわけであるから、マルクスが当然ながら批判的分析の対象としたところのものではないならばなかつたはずである*。

* したがって、われわれとしても、マルクスによるこの批判的分析を十分に理解するためには、その予備的な前提として、ヘーゲル自身によるかの論理的過程の叙述をたどっておくことを必要とするわけであるが、このことについては、次章の「疎外された労働」において詳細に述べることになるから、ここでは省略しておく。

さて、ヘーゲルは、『精神現象学』のB篇「自己意識」の第四章第二節において、生命概念の論理的な発展過程を、彼固有の観念論的な弁証法によって叙述してゐるのであるが、彼のいう生命的無限性の即自かつ向自になつた最後の発展段階においては、要するに、この無限なる生命一般が外に形態化して個々の生物を存立せしめ、

逆に、これらの生物個体は、その有限なる生命活動において自己の内にある本質的実体としての単純なる動的無限性にある超個別的な統一者に自己関係している、という論理構造であると述べている。そして、この統一的一般者を「種属（Ⅱ類）」あるいは「純粹な自我」とも呼んでいる。すなわち、種属的生命の外在化において、個々の生物の存立、およびそれらの生活過程が現象しているのであるが、これらの個体的生命過程そのものは、そこにおける諸契機の止揚の統一の過程として、また内在的な種属的生命そのものであり、そして、このばあいの個別と普遍と同一性に、特殊な個性が成立し、それが「自我」の論理構造をもつにいたる、とヘーゲルは述べているのである。このようなものとして、「純粹自我」ないし種属的生命なるものは、具体的一般者の論理構造であり、現実的な生物界の統一原理たるものであるが、ここに見られる生物個体の種属的生命への向自的な自己関係は、いかにして自己意識に転化するであろうか。

——すなわち、右に述べた具体的一般者としての「統一は、単純な種属（Ⅱ類）であるが、この種属（Ⅱ類）は、生命自身の運動においては、自覚的に、かかる単純なるものとして顕現していない。むしろ、この結果において、生命は、自分以外の他のもの、すなわち生命を、かかる統一または種属（Ⅱ類）と認めている意識を、指示する。しかしながら、種属（Ⅱ類）を種属（Ⅱ類）として認め、しかも、それ自身、自覚的であるところのこの他の生命、すなわち自己意識は、最初には、自分がこの単純なる本質であることのみを自覚し、そして、純粹なる自我としての自分を、対象としている」。『精神現象学』S. 145. 一四八頁*——

* Phänomenologie des Geistes, S. 145. (Sämtliche Werke von Glockner, Bd. 2.) および岩波版、『精神現象学』上巻、一四八頁の略記である。なお、『資本論』S. ……頁は、Das Kapital, Bd. 1. (Adoratskij Ausgabe) および

長谷部訳（青木版）第一巻のことである。以下両者ともこれにしたがう。

ここには、あきらかに、生命そのものの向自的自己関係が意識の対象となり、したがって自己意識としての向自的自己関係に推移してゆく弁証法が、『精神現象学』固有の弁法的叙述によって、展開されていることを、われわれは、見さだめておかねばならないのである。すなわち、生物界の弁証法的運動は、その種属的生命過程としては、個々の生命過程は止揚されて生命一般の流動性が直接的に現出しているわけであるが、この統一原理としての生命一般の絶対的否定性は、しかし、個々の生命過程そのものの質的規定性として、それらの定有的実在において、なお即自的であるにとどまって、いまだ、この定有的実在から自己を区別して向自有的に統一原理として定立しているにはいたっていない。いかえれば、個々の生命過程の向自有的な自己関係は、たんなる可能性にあるにとどまっております、ただ、この可能性を見ぬく能力のある哲学的思惟、すなわち哲学者の「意識を、指示し」て、それによって認識されることを要請している、という論理的な発展段階にとどまっているのである。ところで、このばあい、生物個体が、かかる哲学者の意識にみちびかれて、そこに映しだされた自分の有るべき姿、すなわち向自有的自己関係を、自分自身のものと自ら認めたときに、いかえれば、生物個体自身が、その定有的実在に即自的な否定性を自己のうちに反省し、これを定有的実在から引きはなし、向自有として区別して定立し、そして、この向自有的になった否定性とその定有的実在にたいし他の生命として対峙するにいたったときに、さらに要約的に言いかえるならば、生物個体に潜在的であった向自有的自己関係の単なる可能性が、顕現して現実化されるにいたったときに、生物個体は、その向自有的な生命的自己関係を「自覚した」のであり、したがって自己意識的になっている、とヘーゲルは主張しているわけである。すなわち、「種属を種属として認め、

しかも、それ自身で自覚的であるところのこの他の生命、すなわち自己意識」と、右の引用文において述べられてあるとおりである。

かくてヘーゲルによれば、自己意識とは、生命的自己関係の他のものであっても、それから離れて自立する純粹に意識的な自己関係だけのものではなく、生物個体自身によって自己媒介的に定立された、したがって生物個体に意識された種属的生命への自己関係なのであるから、生命的自己関係そのものなのである。ただ、そこには、無自覚的な生命的自己関係から自覚的な生命的自己関係への推移としての区別があるだけである。そして、このような自覚的な生命的自己関係は、意識ある動物としての人間においてのみ、はじめて成立しうるものと、ヘーゲル自身も考えていたわけである。マルクスが、以上に述べてきた意味のヘーゲルの弁証法的叙述の成果を、その思弁的論理のうちに指示されている具体的真理を、継承しないとすれば不可思議なこととせねばなるまい。なぜなら、ヘーゲルの右の叙述そのものは、動物的生命から人間の生命への自然的転化の論理として、唯物論化するべく、マルクスの哲学的意識を「指示して」いたと、たれしも容易に気づくことができるからである。すなわち彼は、第一手稿の「疎外された労働」なる体系的な断片においてであるが、つぎのとおり述べているのである。

——「動物は、その生命活動と直接に一致したものである。それは、自己を生命活動から区別しない。動物とは生命活動そのものである。人間は、彼の生命活動そのものを、彼の意欲および意識の対象とする。彼は、意識的な生命活動をもつていて、被規定性と直接に一致しない。ゆえに、人間を、直接に動物的生命活動から区別するものは、意識的な生命活動である。まさに、このことよってのみ、人間は、一個の種属的实在（『本質』）なのである。つまり、まさに人間が一個の種属的实在（『本質』）であるからこそ、彼は意識的实在（『本質』）なのである。

質)であるだけである。いいかえれば、彼自身の生命が彼にとって対象なのである。この理由からしてのみ、彼の活動は自由な活動である。」〔疎外された労働〕S. 104, p. 75. 三〇六—七頁)——

すなわち、人間は、意識的に生命活動をするがゆえに、自己の生命活動を意識の対象とすることができ、また、そのかぎりで、自己自身の個別の生命活動を普遍的な種属の生命の無限性にまで反省的に関係づけることができるのである。いいかえれば、彼の意識がこのように自己意識になるがゆえに、彼の生命活動の向自的な自己関係が成立すると同時に、また逆に、この生命活動の向自的關係のゆえに、意識も現実^に自己意識になる。すなわち、「彼が一個の種属の實在なるがゆえに、また意識的實在である」といいうるわけである。ところで、ここで「自己の生命が彼にとって意識の対象である」というばあいの、この意識は、「意慾および意識」とあきらかに區別されているように、それを、ここでも、たんに知的意識に限定してしまうならば、「自己の生命活動を意慾の対象にする」というこの自己意識の实践的契機を、看過することになるであろう。しかも、マルクスは、この契機こそを重要視して自己活動とよび、これを自己意識と區別することによってヘーゲルのな単に知識のない理論的自己意識を抽象的なものとして批判しえたということは、この「自己意識ある自己活動的な生命」が生産的労働そのものことであつたことから、説明を要しないであろう。

——「対象世界の加工というこの生産が、彼の制作的な種属の生活なのであつて、この生産をとおして、自然は、彼の制作物、彼の現実態として現われる。だからして、労働の対象は、人間の種属の生命の対象化でなければならぬ。というのは、彼が、意識のばあいでのように知的にだけではなく、制作的、現実的にも、自分を二重化し、したがつて、彼によって作りだされた世界において自己自身を直観する。」(ibid. S. 105, p. 76. 三〇

ヘーゲルの自己意識のように単に知的な態度にかざられるばあいも、意識は、外的自然の世界を対象とすると同時に自己自身をも内的な対象としているわけであるが、生産的労働のばあいでは、この意識の二重化は、より具体性をもって現われる。生産的労働の外的対象なるものは、すなわち、たんに認識されたかぎりの外的自然であるのではなく、種属的生命の対象化によって加工され制作された自然であり、しかも、この制作された自然に対象化されている種属的生命こそが、また同時に、自己反省的に定立さるべき内的対象でもあるというように、外的対象と内的対象とは一致している。いいかえれば、両者が悟性的に差別された二重性ではなくて、この差別のうち、すでに同一性の現われた二重性であり、悟性の立場を止揚したかぎりの理性の立場における二重性なのである。ヘーゲルの『精神現象学』においても、感覚し知覚し悟性的に思惟する対象的意識と、欲望の満足において主体的な自由を追求する自己意識との、両者の統一を「理性の段階」として位置づけており、外的対象の世界のうちに自己の向自有的本質を見ることによって、両者のこの実践的統一が可能であるとしていることは、事実であるが、しかし、この実践的理性も、ヘーゲル哲学の超感性的思弁性に禍いされて、たんに知識として理論的に展開されているというほかないのであって、実践的な理性を生産的労働のうちに見る、マルクスから見れば、やはり抽象的であるというほかないであろう。すなわち、マルクスによれば、

——「対象的世界の実践的産出、非有機的自然の加工は、人間が一つの意識ある種属的实在（＝本質）であることの、すなわち、種属にたいしては、彼自身の本質として、自分にたいしては、種属の本質として、ふるまう一つの实在であることの確証である」(Ibid. S. 104, p. 75. 三〇七頁)「それだから、人間は、ほかならぬ対

象的世界の加工において、一個の種属的實在(「本質」)であることを、はじめて現実的に確認されるわけである。』(ibid. S. 105, p. 76. 三〇八頁)——

このように、理性による意識の二重性の統一は、たんに理論的に証明されるだけのものでなくして、現実的に確認されているのである。そして、このように実践的に確認されているがゆえに、マルクスにおける理性の自由ということも、ヘーゲルのそれが、たんに理論的であったにたいして、現実的であるといわねばならないのである。人間のこの理性的自由について、マルクスは、動物との比較において次のごとく述べている。

——「動物もまた確かに生産する。しかし動物は、直接的な肉体に支配されて、したがって一面的にしか生産しない。ところが、人間は、肉体的欲望からの自由のなかで、はじめて真に生産する。すなわち、普遍的に生産するのである。動物は、自己自身を生産するにすぎないが、人間は、全自然を再生産する。動物の生産物は、その物質的肢体に直属するが、人間は、彼の生産物にたいして自由に対立する。動物は、その属している種の基準と欲望とにしたがって形づくるだけであるが、人間は、あらゆる種の基準にしたがって生産することができる。また、いかなるばあいにも、対象にたいして、それ固有の基準を付与することができる。したがって人間は、美という法則にしたがって形づくったりすることもできるのである。」(ibid. S. 104-5, p. 75-6 三〇七頁)——

人間の生産が、このように普遍的に凡ゆる基準によって行われるのは、この生産的労働において、「肉体的欲望から自由」に解放されて、向自的に種属的生命的の無限性の立場にたっているからである。そしてまた、そのかぎりでのみ「全自然を再生産する」ということも可能なのである。さらにまた逆に、全人類を自己の本質として自己意識する自己活動的な人間の生活の眞実性は、全自然が生産的労働によって再生産されつつあるという歴史

的事実によって確証されている、といいうるわけである。したがって、ここにおいてこそ、実践的に確証されている理性的自由なるものの現実的な姿をば、われわれは、見ることができたらせねばならないであろう。

しかしながら、マルクスの以上のごとき主張は、人間の生産的労働が、「自己意識ある自己活動的な」生命的自己関係を確立したかぎりで、その本来的な姿を描いただけのものにすぎない。現実の生産的労働は、資本制社会における賃労働者のそれとして、この本来的な姿は喪失して、自己疎外の状態にある。この本来的な生産的労働の論理構造が、いかにして疎外されるにいたるかの論理過程をたどることは、別稿の研究内容をなすものであって、賃労働者が労働市場で「単なる商品人間」として疎外されているばあいの、その自己意識の論理構造の分析だけが、本稿の目標であつたはずである。「単なる商品人間」としての賃労働者の自己意識は、法律的に自由であるにしても、この自由は、もちろん、いましがた論述してきたような本来的な姿における生産的労働に見られる理性的な自由ではありえないが、ヘーゲル的な「自己意識」のカテゴリーによって把握されうるかぎりでは、なおヘーゲル的な理性的自由を、ただ理論的にのみ、したがって観念論的にもつことができる、と前節で述べられてきたのである。

* 拙稿「四四年手稿断片〈疎外された労働〉におけるマルクスの哲学思想」(『立命館経済学』第三巻の第四号および第七号、第四巻の第一号、第二号に連載)を参照。

ところで、現実の賃労働者の自己意識は、「単なる商品人間」のそれとしても、感性的欲望からの向自有的自己関係にあるのであって、ヘーゲルのごとく感性的知識からの解放としての自己意識ではありえない。それは、あくまで、感性的欲望から対象的に自由になる生命的自己関係として問題にされなければならない。しかるに、

「単なる商品人間」は、法律的に、観念的に自由であっても、対象的には、すなわち経済的には、不自由であった。そして、ここにおいてこそ、われわれは、この「商品人間」が疎外の状態にあるという事実を、見なければならぬのであるが、この疎外は、たんにヘーゲル的な自己意識の疎外でなくて、「自己意識ある自己活動」的な生命的自己関係の疎外として、問題にされねば、マルクスのありえないわけである。要するに、「単なる商品人間」は疎外されていても、たんに意識的な抽象的人間になってしまっているのでなくて、やはり、感性的欲望をもった自己活動的人間である。このように現実的に生活している感性的人間の自己意識が疎外されているばあいには、それは如何なる論理構造にあるかの吟味が、われわれの当面の問題であつたはずである。

五、欲望的人間の生産的労働者としての種属的自覚における論理構造

くりかえして言うことになるが、マルクスは、その『経哲手稿』の「哲学的断片」において、ヘーゲルの自己意識の論理構造を唯物論的に改作するにあたって、自己意識が人間に固有のものとして成立するにいたるための実体であるところの、動物の、したがって動物としての人間の、生命的自己関係の契機を、とくに重要し、しかも、これを人間としての人間の自己意識の実践的契機として把握し、したがってまた、生産的労働者の自己意識が成りたつための実体として概念する、という方向に彼の方法論的意識をはたかせたというのが、前節の所論であつた。そして、かかる生命的自己関係を実体とする人間的自己意識をもつところの、すなわち「自己意識ある自己活動」的な生産的労働者が、資本制社会に固有な労働市場において、現実に「商品人間」として疎外されているばあいに、この「単なる商品人間」の自己活動的な自己意識が、その本来の論理構造を如何に質的に異つ

たものに転化せしめているか、を解明するという課題に、われわれは、いま当面しているというわけである。

しかしながら、この課題の解明のためには、われわれは、その前提として、人間としての人間の実践的自己意識の論理構造を、その本来の姿において明確に規定しておかねばならないのであり、しかも、そのためには、さらに、生命的自己関係についてのヘーゲルの叙述を、われわれは分析的に吟味せざるをえないということも、前節のところから、すでに明らかなることであろう。なぜなら、生命的自己意識についてのヘーゲルの思想なくして、マルクスによる批判的継承もありえないからである。そこで本節においては、まず、人間に固有の理性的な実践的自己意識の論理構造を、同じく『精神現象学』の叙述を批判的に媒介しながら、マルクスの規定することによって、その疎外の状態としての「単なる商品人間」の自己意識の論理構造を論述するための前提を、なお準備しておかねばならないことになる。

まえにも述べたように、個々の生命が種属的生命を自己の本質として向自的に反省し自覚したとき、生命のこの意識的自己関係が、ヘーゲルにおいて、まさに自己意識と呼ばれているものであった。すなわち、彼が自己意識として規定するところのものは、生命的自己関係を他のものとして意識するということであり、それ自身一つの生命的自己関係であるが、しかし、意識によって媒介されたかぎりの、すなわち自覚的な、生命的自己関係のことである。さきに引用したヘーゲルの「純粹の自我」から自己意識へ自己展開する弁証法についての叙述においても、——「種属が種属として認め、しかも、それ自身、自覚的な種属であるところの、この他の生命、すなわち自己意識」(『精神現象学』S. 145. 一四八頁)——と述べられている。したがって、「純粹な自我」から自己意識への自己展開ということも、自己意識のない生命的自己関係から、自己意識ある生命的自己関係への論理的自

己運動であったわけである。

そこで『精神現象学』における、この論理的段階からのヘーゲルの叙述における論理的運動は、かかる自己意識が「精神」にまで自己展開してゆく弁証法であつて、そして、この弁証法は、単純なる自我としての種属的生命が、個々の生命によつて、内的対象として意識的に定立され、したがつて、個々の自己意識の本質として自覚されるといふ、自己意識そのものの経験の論理なのである。あたかも、自己意識としてのこの最初の「経験の進むにつれて、この抽象的なる対象が豊富にされ、そうして、われわれの生命のばあいに見たような展開をうる」（*ibid.* S. 145. 一四九頁）はずのものである。そして、このようなヘーゲルの叙述をマルクスが如何に批判的に継承したか、ということの分析的吟味が、われわれの本節において前提的に問題すべきことであるわけである。そこで、まず、ヘーゲルの叙述からたどつてゆくことにするならば、

——「自己意識の概念は、つぎの三つの契機において、はじめて全きをうる。a、純粋なる区別なき自我が、自己意識にとつての最初の無媒介の対象である。であるが、b、この無媒介態は、それ自身、絶対の媒介態であり、それは自立的対象の廃棄としてのみ存在する。いかえれば、この無媒介態は、欲望である。欲望の満足は、もとより自己意識の自己自身のうちへの反省であり、または真理となれる確信ではある。しかしながら、c、この確信の真理は、むしろ二重の反省 *die doppelte Reflexion* であり、自己意識を二重にすることである。」（*ibid.* S. 146-7. 一五〇頁）——

自己意識の概念のこれらの三つの契機は、また同時に、その概念的運動のための三つの契機であるかぎり、この運動の三つの発展段階のそれぞれの特徴をなすものでもある。すなわち、(a)は、自己意識の運動の出発点

である。ヘーゲルも「自己意識は、最初には、自分が種属としての単純なる本質であることのみを自覚し、そして純粹な自我としての自分を対象としている」(ibid. S. 143. 一四八―九頁)と述べている。ところで、この「純粹な自我が、この種属、または、区別を区別とみない単純なる一般者であるのは、この自我が形成された自立的なる諸契機を否定する本質であることに、ひたすら基いている」(ibid. S. 145. 一四九頁)のである。そこで、自立的な生命形態の媒介的な自己関係たる自己意識においても、その直接的な生命的自己関係を否定的に止揚する一般者としての自我、すなわち、自己意識ある自我、したがって自覚的な種属的生命としての自我は、この直接的自己関係にある自らの定有的生命形態を、他のものとして自己のうちに定立し、そして、これを廃棄せんとする向自有的な無限性になければならない。すなわち「自己意識は、自分にとって自立的なる生命として現れるこの他のものを、廃棄することによってのみ、自己自身であることを確信している。すなわち、欲望 *Begierde* である」(ibid. S. 146-6. 一四九頁)とヘーゲルはいう。かくて欲望は、自己意識なるものの最初の形態でなければならぬ。

すなわち、欲望とは、生命形態の直接的な自己関係としての、したがって、自己関係のいまだ定立されていない定有としての個々の生物が、即的に無限の種属的生命を自己のうちに潜在せしめている状態である。すなわち、右の引用句において、ヘーゲルも、欲望を「それ自身、絶対の媒介態である無媒介態」と規定した所以である。したがって、このような欲望をもつ個々の生物は、自己の定有的実在性において、その実在性の契機、すなわち、外的対象をも、つねに廃棄せんとし、そして、廃棄しうる確信になければならない。いいかえれば、欲望としての自己意識は、つねに外的対象を、無力なる他のものとして直接的に所有している——ただしくは、占有

している——わけである。このように見えてきて始めて、われわれは、ヘーゲルのつぎの言葉も、容易に理解しようにいたるであろう。

——「この他のものが無力であることを確信せる自己意識(すなわち欲望)は、この無力を、他のものの真理として自己にたいして定立し、自立的なる対象を滅却し、そうして、これによって、自己自身であるという確信を、真の確信として、すなわち、自己意識自身にとって対象的な様相において生じた確信として、獲得してゐる。」(Ibid. S. 146. 一四九頁)——

すなわち、欲望としての自己意識が、自己自身であるという確信を、その確信のままに実行することにおいて、いいかえれば、欲望を満足さすという経験において、この自己意識は、すでに自己展開の運動を始めていたのである。したがって、右の引用句としては、ヘーゲルの自己意識の概念的自己運動も、すでに第二段階(b)に発展しているわけである。そして、この段階において、生命的自己関係が自己意識の対象になっているかぎりで、それは人間の生命的自己関係であり、もはや動物のそれではない。したがって、欲望としての自己意識ということも、自己意識的欲望、すなわち人間の欲望である。ところで、この人間の欲望の自己展開の論理は、前節に見てきたような生命一般の、ないし、動物的生命の弁証法的運動と、当然ながら原理的に同一の形式をとらざるをえない。なぜならば、自己意識の自己運動は、生命的自己運動の自覚された形態であるにすぎないからである。したがって、ここにヘーゲルの叙述を、そのままに引用しておいても、理解は困難でないはずである。

——「欲望と、これが満足において達成される自己自身であるという確信とは、(外的)対象を条件としていゝる。なぜかというに、この確信は対象たるこの他のものの廃棄によって存在するが、この廃棄が存在するため

には、対象たるこの他のものが存在しなくてはならないからである」。すなわち「この満足において、自己意識は自分の対象の自立性を体験する。それであるからして、自己意識は、否定するという関係によって対象を廃棄するわけにゆかない。むしろ自己意識は、この関係のゆえに、かえって対象を、そうして同様に欲望を、再び生産する。」(ibid. s. 146. 四九頁)——

かかる経験によって、自己意識自身のうちに、「欲望の本質が、自立的对象としての他のものである」という真理が生じたことになる。ところで、ここに意識ないし欲望の対象としての他のものとは、自己意識のもつ二重性の構造のゆえに、たんに外的対象だけでなく、同時に内的対象としての自己自身の本質、すなわち生命的無限性としての種属の全体をも、いみするはずである。だがしかし、さしあたって、前者に限定して、われわれの理解をすすめてゆくとするならば、ここでは、外的対象の無力を確信して、この確信のままの實行において、かえって外的対象の自立性を、自己の同一の確信の真理とせざるをえないという自己矛盾にあることを、欲望的人間は、体験せざるをえない、ということなのである。

——「しかしながら、これと同時に、自己意識は絶対に自分だけでも存在し、そして、この自分だけの存在は、ひたすら対象の廃棄にもとづいている。そこで、自己意識が真理であるから、自己意識は、その満足を獲得しなければならぬ。だが、対象が自立的であるがゆえに、自己意識は、対象自身が自己において否定を實行することによってのみ、満足を達成することができるのである。そうして対象が、かく自己自身の否定を自己において実行しなくてはならない所以は、対象は、自己において否定的なるものであるということ、対象は、他のものになりたいのみ対象でなければならないということである。」(ibid. s. 146. 一四九—一五〇頁)——

この言葉において、外的対象が自己意識にたいして無力であり空無であることを、いいかえれば外的対象の自立性ということが、自己意識の自立性のまえにおいて、たんなる仮象にすぎないものであることを、あきらかにヘーゲルは主張しているわけであるが、このような主張にたいして、マルクスが「第三手稿」の「哲学的断片」において、鋭く分析的に批判していることは、すでに本稿の第二節において述べてきたところである。このことの詳細な吟味は、そこからの類推にまつこととして、ここでは簡単に、欲望についてのマルクスの規定を述べておきたい。

ヘーゲルが右に規定したときものとしては、欲望充足における自己意識の自己矛盾ということも、また、この自己矛盾が原理となつて第二の論理的発展段階において成立するはずの、精神的自己意識の欲望的自己意識への自己疎外ということも、マルクスにとっては、真実の矛盾ないし疎外ではありえないわけである。このことは、ヘーゲルの自己意識が、現実の人間の自己意識でなく、絶対精神ないし神の自己意識であつたためでなければならぬ。現実の人間においては、なるほどヘーゲルのいうとおり、自己意識も自立的であるが、外的対象の主体性のまえには、それは逆に自己否定的であること、すなわち、ヘーゲルの自己意識の方が無力であり空無であることを、その本質的關係とせねばならないはずである。マルクスは右の哲学的手稿において、「他のものもの」とにおいて決して自己自身であることを喪失してはいない」とするヘーゲルの自己疎外の不徹底を、指摘しているのであるが、マルクスにあつては、このような「外的対象のもとにおいて自己肯定的である」自己意識、すなわち、自己の欲望的定有そのものを、ヘーゲルとともに自己疎外と呼ぶとしても、この疎外から回復せんとする向自的な自己関係の方向は、ヘーゲルにおいては、外的対象から遠ざかるというかぎりの自己意識の自立性にあるに反

して、マルクスとしては、逆に、外的対象そのものの本質としての実体的根拠へという方向において、欲望を止揚せんとする自己関係的な生産的労働を、自己意識と呼んでいるはずである。そのかぎりでは、「対象は自己において否定的なるものである」というヘーゲルの言葉もまた、マルクスの自己意識においても、このような逆の意味で、不可欠な規定であるとせねばならない。このようにして、ヘーゲルの次の一句も、対象に即自的に潜在するこの否定的なものの向自的に反省してゆく方向が、意識の内であるか外であるかの差異を別とすれば、マルクスがそのまま継承することのできたものとして、われわれは、理解しうることができるであろう。

——「対象は、かく自己自身において否定であると同時に、自立的でもあるがために、対象は意識であり、（したがって自己意識である。）」(Ibid. s. 103, 一五〇頁)——

外的対象へ疎外されたかぎりの外在化せる人間意識としての欲望は、この外的対象のもとにおいて自己否定的でないかぎり、つねに対象に誘因されて、その満足から新たな欲望へと、悪しき無限に囚われていなければならぬが、これとは逆に、外的対象のもとにおいて自己を断念するかぎりにおいては、この欲望の自己止揚としての向自的な生命的自己関係は、外的対象そのものの本質的普遍を認識する意識をば媒介にした生産的活動と同一であって、対象自体の自己否定の方向に、そうて反省する自己意識でなければならぬ。このばあい、欲望の自己関係してゆく内的対象としての生命的無限性は、人間の非有機的体としての外的自然対象全体の絶対否定態となり、そして、この絶対否定態が同時に主体的には、人間種属の存立根拠でもあるわけであるから、ここに、種属としての人間の生活が自覚されるにいたるのである。これが、外的対象自体の向自的な自己関係としての自己意識的反省であり、「対象が意識であり自己意識である」ということの唯物論的に改作された真実の意味であ

る。

これに反して、ヘーゲルにあっては、欲望充足の自己意識は、自己肯定的であるかぎりでは、その「自立的対象の廃棄」の反覆は、悪しき無限であるはかない。そして、この悪しき無限の姿のままの、「絶対的媒介態である無媒介態」が自己意識されるかぎりにおいては、ここに、いまひとつの——すなわち、すなわち、たんに場所的・論理構造にある——種属的生命の自覚は可能であり、したがって、ヘーゲルにおいても、いな、おいてこそ、「対象は意識である」といいうるではあろう。しかし、それにしても、ヘーゲルの種属的生命の無限性は、外的自然そのものの自己展開という自然史的過程の統一原理としての真実の無限性になく、ただ外的自然の個々の対象を、否定的に媒介するだけの主観的な——非過程的な場所としての——流動的生命一般にすぎないことを、ここにおいても、われわれは見る事ができるのである。このようなヘーゲル的な意味においてでなく、マルクスの意味において、ヘーゲル自身のつぎの言葉が理解されるならば、この言葉は、いっそうの具体性と真実性を加えてくるであらう。

——「欲望の（内的）対象たる生命においては、否定は、他のもの、すなわち欲望（的定有）において存するか、それとも没交渉な形態にたいする限定として存するか、それとも生命の非有機的自然として存するかである。絶対的否定という意味での否定が結合せるこの一般的なる自立的自然は、種属としての種属、または自己意識としての種属である。自己意識は、その満足を他の自己意識においてのみ達成するのである。」(ibid. S.

146. 一五〇頁)——

欲望を満足せんとする生命的確信における絶対的否定性ないし具体的普遍性は、人間の個々の欲望的実在性に

において即自的に潜在しているか、それとも、種々雑多な生活諸形態の質的規定性として現れているか、それとも、人間の種属的生活の非有機的地盤として存するか、その何れでもある。そして、この第三の存在の仕方としての、すなわち「絶対的否定」という意味での否定が結合しているところの、この一般的なる自立的自然」のことについて、マルクスは、右の言葉につづけて、つぎのごとく述べている。

——「人間の普遍性は、実践的には、まさに、直接的生活手段である自然についても、また彼の生活活動の材料、対象、道具である自然についても、全自然を彼の非有機的体軀とするという普遍性のなかに、現れる。自然、要するに、それ自身が人間の体軀ではないかぎりでの自然は、人間の非有機体軀である。」〔疎外された労働〕

例] S. 103, p. 74. (三〇五—六頁)——

このように全自然を自己の非有機的体軀と考えることは、個々の人間は、その欲望的実存において人類の普遍性の自覚をもっていなければ、不可能なことである。そして、この自覚ないし自己意識は、欲望的人間の生命の自己関係であり、この自己関係への意識である。すなわち欲望的人間が、自己の内に種属的生命を対象としてもつことであり、この生命の無限性を自己意識することである。つぎのマルクスの言葉も、このような論理の意味において理解されるべきであろう。

——「人間が自然によって生きるといふことは、とりもなおさず自然が人間の体軀であり、人間は死ぬまいとすれば自然によって絶え間ない前進を続けなければならない、ということである。人間の肉体的および精神的生活が自然と関連するということは、自然が自己自身と関係するということ以外に、なんらの意味ももっていない。なぜなら、人間は自然の一部分であるから。」(Ibid. S. 103, p. 74. 三〇六頁)——

ここにマルクスのいうこの「自然が自己自身と関係する」ということは、自然自体の向自有的な自己関係のことであつて、そして、このことは、欲望的人間の生命的自己関係としての生産的労働が、その実践的生活によつて現実的な具体性を示しているところのものであるが、この自己の定有的欲望を、その人類の普遍性に止揚する方向において満足せしめんとする自己意識において、われわれのいつさいの精神的生活が豊富に展開されうるとせねばならない。ところで、この精神的生活においては、われわれの物質的生活の人類の意義が、つねに問題にされているはずである。すなわち、有限なる欲望的人間がその無限なる種属的生命にまで自己止揚してゆくところの、この向自有的な自己関係が、われわれの意識の内的対象となつてゐる。したがつて、われわれの精神的生
活における自己意識の満足ということは、この自立的な内的対象としての種属的生命が、われわれの意識的の世
界への自己実現において、すなわち、一個の人間の自己意識だけの満足によつてではなく、彼のほかに存在する
他の多くの、否、すべての人間の自己意識の満足において、達成するのである。

以上が、いましがた引用しておいたヘーゲルの言葉にたいするマルクスの解釈であるが、マルクス自身も、この言葉を同様に転釈して理解してゐたはずであると、われわれが想定することは、ここに再び引用したマルクス自身の言葉からも、きわめて自然であるであらう。ところで今や単純な自我(a)と、欲望の実存(b)との、両契機の統一からなる欲望的人間の自己意識から、われわれは、ヘーゲルの論述をたどるままに、すでに自己意識の概念のための、第三の契機ないし第三の論理的段階(c)としての「精神」の領域に、はいつてゐるのである。なぜなら、種属的生命の意識的自己実現ということにおいて、「或る自己意識が他の自己意識に対立して存在している」ということが現われており、そして、ヘーゲルの規定によれば、「自己意識の内的対象として現われる

ばあいには、自我と対象との一致として、すでに、精神の概念が、われわれにたいして現れている」（『精神現象学』S. 147. 一五一頁）と云うことになるからである。

すなわち、このようにして、『精神現象学』における「自己意識」の概念的運動の第三の発展段階は、つぎの発展段階としての「精神」の、さらに「理性」にまで発展するための、主体的な契機をなすものであるが、——したがってまた、この概念的運動を批判的に継承したマルクスの立場においても、生産的労働者の精神的生活ないし理性的態度なるものが、如何にあるべきかの問題を唯物論的に解明するために、この第三の発展段階についてのヘーゲルの叙述の分析的吟味を、さらに続けて進めておくべきであるかに思えるのであるが、——しかしながら、本節のテーマは、さいしよに述べておいたとおり、生産的労働者の、また彼が資本制的疎外の状態にあるときの「商品人間」の、自己活動的な自己意識の論理構造だけを、とりあえず、問題にすることに限定してあるわけであるから、ヘーゲルの「自己意識」についての叙述も、その概念的運動の第二の発展段階までの分析的吟味で、さしあたり、十分であると考えるべきである。そして、マルクスという「商品人間」に疎外されざる以前の生産的労働者が、その本来の実践的な自己意識を、それが精神の領域において理性的でもある発展段階を捨象して、その自己活動的な実体としての生命的自己関係の契機だけにおいて、その論理構造を、本節の以上のところで、われわれはマルクスのに理解してきたわけであった。そこで残る問題は、この自己活動な生命的自己関係を、いかえれば、欲望の人間としての「商品人間」が、向自有的に種属的生命に自己関係するということ、その疎外された姿において、概念的に把握するということではならぬ。

とにかく、感性的に欲望的な人間は、その種属的生命への自己関係において、この実体的な生命世界にあって、

自分がその単なる一要素になることを知るわけであるが、しかし、この生命世界において相互に区別された定有諸形態を、また相互に各自の意識の対象とすることができるのである。そして、欲望的定有から人類的生命への各この否定的自己関係が、最初の無自覚的な生命的向自有から、その自覚されたる自己意識的向自有へと発展することによって、自己意識相互間の関連という精神の世界が開かれる、というのが、『精神現象学』における概念的運動としての、「自己意識」の第三発展段階以下の論述になるのであるが、しかし、このことを、念頭においていたうえで、生命的自己関係が、その無自覚的形態からその自覚的形態へ発展するというヘーゲルの論理運動の第二発展段階を上述のごとく理解してならば、それは、それだけとして、いまここで、賃労働者の自己意識の論理構造をいっそう具体的に把握するために、役立つものであるとせねばならないのである。なぜなら、「単なる商品人間」の観念的自己意識が対象として定立するところのものは、直接的には、その無自覚的な自己意識そのものとしての生命的自己にすぎないのであって、この生命的自己の向自有的無限性までの自己関係において、はじめて、賃労働者の定有的実在としての労働力ないし貨幣が、否定的に所有されうると、考えなければならぬからである。

しかしながら、現実には、労働力ないし貨幣は、賃労働者にとって判断の対象になる以前において、すでに欲望的対象となっており、したがって身体的に所有されているのであるが、この欲望的内的対象としての生命的自己への自己関係は、その普遍的な種属的生命の自覚ではなくして、ただ単に直接的な個別的生命への自己意識にすぎないのであるから、この自己関係的運動も、また単に欲望を満足せしめんとするところの、衝動的なものにとどまるほかないものである。そして、このような個別的生命への向自有的自己関係を意識が自己のうちに

定立したとき、「単なる商品人間」の自己意識が成立するのであるから、労働力ないし貨幣を感性的な外的対象として所有することは、かかる反省をするだけの抽象的自己意識にとっては、ただ抽象的にのみ、したがって、ただ占有としてのみ、可能であるにすぎないのである。

ところで、この抽象的自己意識の反省の対象となるところの、かの直接的な個別的な生命の自己意識における対象所有の具体性については、ヘーゲル『論理学』の向自有的カテゴリーにおいては、ただその論理形式が問題であるかぎり、当然ながら捨象されるほかなく、ただ観念的に推定されうるだけの抽象性にとどまっていたのである。また、マルクスの「哲学的手稿断片」においても、現実の人間の自己意識そのものと同じく論理形式としての向自有的カテゴリーを、唯物論化することが、ヘーゲルの自己意識批判の目的であったかぎり、外的対象にたいする生命的所有という具体的な現実形態も、当然ながら捨象されるほかなく、たといよように、われわれは理解するほかなく、すなわち、マルクスとしては、また当然ながら、その具体的な現実形態としての身体的所有、すなわち欲望については、賃労働者の向自有的自己意識を展開せんとする意図のもとに、別に分析的に論述すべきことを、同時に念頭に浮べていたはずのものとせねばならない。そして、その実現されたものが、「第三手稿」における第三断片「欲望、生産および分業」なる断片の前半、および第四断片「貨幣」であると見ることが出来る。

しかしながら、これらの断片においては、人間的欲望の疎外状態の叙述が主であって、そこからの自己回復の方法論契機は、積極的に展開されていない。このことは、つぎのごとき理由にもとづくと考えらるべきであろう。すなわち、欲望の人間が種属の生命の無限性にまで自己否定的に反省する、という向自有的論理構造をもったか

ぎりでは、生産的労働者は、その本来の自己意識の姿にあるわけであるからして、その疎外された自己意識の姿を、まず問題にするかぎりでは、かかる向自的反省のための否定性が、實在性から、いまだ自立的に対抗的なものになるにいたらないところの、すなわち、この欲望的實在性に直接して即自的であり、したがって、「商品人間」の欲望の質的規定性を決める原理にとどまっている状態だけが、右の諸断片において問題にされたというふうには、当然ながら論理的に推定されうるわけである。そして、マルクス自身も、第三断片の「欲望」の部分、ならびに第四断片「貨幣」においては、賃労働者の労働市場での疎外された状態を、じじつ、かかるものとして描いているのである。

六、労働市場における賃労働者の貨幣による欲望的自己疎外

現実的賃労働者の労働市場での疎外された状態としての、「単なる商品人間」の自己意識を、いよいよ論述すべき順序にきたのであるが、ここで、マルクスの『経哲手稿』全体の内容的な構成について、要約的に触れておくことは、以下の論述のための便宜であると思われる。

すなわち、この『経哲手稿』は、その「第一手稿」の第四断片「疎外された労働」において、私有財産一般が、その本質的内容において、外在化された労働、疎外された人間的生活そのものと相い表裏して一致するということが、体系的に論証されている。そして、さらに続いて「第二手稿」の「私有財産の関係」および「第三手稿」の第一断片「私有財産と労働」においては、資本制的私有財産すなわち資本制的な国民の富の制度のもとにおいて、右の「第四断片」にすでに論及されていて、しかも、なお、それを補足すべきものと考えられたところのもの

のが、すなわち、資本制的に外在化され疎外された人間の生活および生産的労働の対象化された領域において成立するところの現実的な経済的諸関係が、具体的に述べられているのである。そして次に、「第三手稿」の第二断片「私有財産と共産主義」においては、種属的自己意識をもつ本来の人間生活における社会的生命の発現が、過去および将来の共産主義によってのみ確証され、また保証されているということ、したがって、私有財産制度のもとでは、さらに、その特殊化された資本制社会のもとでは、この本来の人間的生活および生産的労働が、自己疎外的に顛倒した姿をとるにいたっているということ、これらの二つのことの論理的関連を、歴史的展望のもとに展開すべく意図されているのであって、さらに、この意図のもとに、資本制的私有財産制度としての現在の発展段階における右の疎外的顛倒の姿を、たんなる欲望の人間として問題にしたのが、第三断片の前半の「欲望」であり、その後半としての「生産および分業」は、この疎外的顛倒にいたるまでの生産的労働の疎外的外在化の過程を論理的に分析したものと、考えることができる。

ところで、「第一手稿」の第一、第二、第三の諸断片、すなわち、「労賃」、「資本利潤」、「地代」と題された諸手稿は、その第四の手稿断片において分析されたところの生産過程における「疎外された労働」にまで下向するたぬの出発点としての、国民経済学的事実が、事実として記述されるとともに、そこに問題が提起されているのであるからして、「第二手稿」からの「第三手稿」の諸断片への配列は、右に述べたような意味において、労働の自己疎外を、その根拠において把握したところの、この第四断片に出発して、そこに分析され抽象されるところのこの根拠から、それにもとづく諸関係を上向的に具体化し現実化していつて、最初の下向の出発点であった国民経済学的事実を、否定的に把握するに到るという方法論によって、「経哲手稿」の全体は構成されている、

と見ることができであろう。しかも、「第三手稿」の最後に配置されたところの「哲学的断片」こそは、この方法論の原理を確立してあるものであるからして、『手稿』全体におけるマルクスの方法論的構想は、すでに十分に体系的であり、後年の『資本論』の学的体系性を、その形式においてのみならず、その内容においても、準備し約束しているものと、われわれは見ることができる。いいかえれば、『資本論』が成立しうるための体系的思想は、この四四年の『経哲手稿』において、すでに基礎づけられていた、とわれわれは考えねばならないというわけである。

われわれは本稿にはじまる三篇^{*}の労作において、このような見とおしのもとに、この『経哲手稿』の思想内容を論理的に把握することを、一貫した意図としてるのであるが、さて、いま本稿の本節以降において、資本制的労働市場に疎外されている「商品人間」の、その欲望の質的規定性を、さしあたり、マルクスの「第三手稿」の第三断片の叙述のうちに見てゆこうとするさいに、この第三断片が、第一、第二の両断片および「第二手稿」とも内容的に関連していることの事実を、念頭においておくことが、やがて、『経哲手稿』全体の体系的関連のうち位置づけて考えるまえに、ぜひ必要な、したがって、その理解のために便宜なことであるはずである。そこで、この第三断片の叙述の冒頭のパラグラフからの引用から始めてゆくとすれば、マルクスは、つぎのごとく述べているのである。

* ここに三篇の労作とは、「単なる商品人間」の向自有的自己意識の論理構造を分析的に解明しつつある本稿と、「単なる労働人間」のそれを既に解明したはずの別稿、「四四年手稿(疎外された労働)におけるマルクスの哲学思想」と、右の兩者の統一的な内容の一労作とを指す。ところで、この第三の労作は、本稿に連続せしめて、第八節以下の三節として、次に掲載することにした。

——「われわれは、社会主義の前提のもとで、人間の欲望の豊富さ、したがってまた、生産の新しい様式ならびに対象が、どのような意義をもつかを見てきた。すなわち、人間の生活力の新しい活動と、人間の存在の新しい充実とが、それである。

ところが、私有財産の内部では、それは、反対の意義をもつ。あらゆる人間は、他人に新たな欲望をおこさせようとして投機するのであるが、その結果、他人に新たな犠牲を強要し、他人を新たな隷属関係のもとにおき、そして他人を新たな享楽様式、したがってまた、新たな経済的破滅へ誘惑する。どの人間も、他人にたいして、ひとつの外的な生活力をつくりだそうとつとめ、そこに、彼自身の利己的な欲望の充足をみいだそうとする。それだから、対象の量が増すにつれて、人間を屈従させている外的存在の王国が、巨大となる。そして、新たな生産物は、すべて、相互的な詐欺と掠奪との新たな産出力である。そのために人間は、人間としてますます貧しくなる。彼は、敵対的な（外的）存在を奪いとるために、ますます多くの貨幣を必要とする。そして彼の貨幣の権力は、生産の量とは、まさに逆比例する。すなわち、貨幣の権力が増加するにつれて、彼の窮迫が増大する。それだから、貨幣欲は、国民経済によって作られた真実の欲望であり、また、国民経済が作りだす唯一の欲望である。」（「欲望、生産および分業」 S. 140, p. 115, 三五九頁）——

この引用文においては、資本制的私有財産制度における人間の欲望の自己疎外の状態が、社会主義ないし共産主義のもとにおける本来の人間の欲望との比較において記述されているが、それは、現実の人間の欲望が向自的に種属的生命の無限性のうちに止揚され、そのかぎりで逆に、この無限性の個性的表現としての人間の欲望、いかえれば、人類的使命を自覚したかぎり、物質的にも精神的にも創意に満ち、限りなく豊富にして充実した

ところの、生産的労働と社会的な生活における本来的な人間の欲望が、その商品生産と貨幣を媒介にしたその商品交換とによって、顛倒的に疎外されていることが、総括的に述べられているのである。それにしても、この総括的に記述された人間の欲望の疎外状態は、ブルジョア社会の市民たるかぎりのすべての人間に共通である。そこで、この市民社会における階級の対立が、この共通の疎外状態において、いかなる区別と差異とを生みだすかの原因が問題になるわけであるが、これについては、「第一手稿」の「疎外された労働」なる断片において、マルクスは、すでに解明したのであるからして、この「第三手稿」第三断片にあつては、したがって、われわれに於いても、ここでは、この原因の結果としての疎外状態の階級的差異の叙述だけが、つぎの問題となる。これについて、彼は、右の引用文に続けて述べている。

——「人間の欲望のこの疎外は、一方における欲望とその手段の精巧化、他方における欲望の動物的な野蛮化、徹底的な自然のままの抽象的単純性をつくりだす。」(ibid. s. 141, p. 117. 三六〇頁)——

すなわち、このように、資本家的支配階級と賃労働者階級とへの人間の欲望の分裂と、それぞれへの歪曲された形態化を説いているのであるが、われわれが「商品人間」の欲望の疎外を主として問題にしている本稿の視角からして、それについてのマルクスの描写を次から次へと拾ってゆくことによって、われわれは、「単なる商品人間」の疎外の状態を、具体的に知ることができるのである。

——「戸外の光り、空気などにたいする欲望、ないし、もつとも簡単な動物的な清潔さ、労働者にあつては欲望であることを止め、人間は穴居生活にかえる。汚穢、人間のこの墮落、腐敗、文明の下水溝——これは文字どおりに理解すべきだ——が、完全な、しかも不自然な放任主義、腐敗した自然が、彼の生活環境となる。

彼の感覚は、したがって彼の人間的な形式においてばかりでなく、また非人間的な、確かに動物的な形式においてさえ、もはや全くありえない。とすれば、人間は、もはや単に人間的な欲求をもたないばかりでなく、動物的欲望でさえ喪失しているとせねばならない。」(ibid. s. 142, p. 117, 三六〇—一頁)——

このように、近代ブルジョア社会においては、「労働者の欲望は、物質的生活のぎりぎり最低の維持にまで、また彼の活動をもっとも抽象的な機械的運動にまで還元される」のであるから、「まず第一に活動についても享樂についても、機械的運動なり最低水準なりの欲望以上の欲望を抱かない生活もまた、一つの人間的な生活なり生存であるという常識が、支配者の側に成立する」。そして「つぎに第二に、窮迫このうえない生活ないし生存を標準として、しかも、これを一般的な標準として算出する」学説が生れる。けだし、窮迫した最低生活は大多数の国民に妥当し、しかも、この大多数の国民たる「個々の賃労働者は、一つの無感覚、無欲望な存在とされ、彼らの活動も、すべての具体的活動から抽象された純粹活動に転化されているからである」(ibid. s. 143, p. 118, 三六二頁)。このようにして、労働者の人間的欲望は、抽象的に純粹な無感覚な機械的運動に固定化されていくのであるが、この人間的欲望の自己喪失は、しかし、他方における、外在化された利己的欲望とその充足手段の増加ないし精巧化との結果でしかない。したがって、私有財産の支配する市民社会では、「人間性から奪はれたものは、貨幣と富とで、すべてが補填されている」(ibid. s. 144, p. 119, 三六三頁)といふことになる。かくて、労働者といえども、その人間的欲望の喪失にかかわらず貨幣欲と所有欲とは、観念的にはあるが、けっして、喪失するはずがないのである。

——「需要は勿論、貨幣を所有していないものにも実存する。しかし、貨幣をもたないものの需要は、私にた

いして、第三者にたいして、（すなわち、それ自体として）何らの作用、何らの実存もたず、したがって、それ自体としても、非現実的、無対象のままにとどまるところの、単なる表象上の存在にすぎない。貨幣に基礎づけられた有効な需要と、私の欲望、私の情熱、私の願望、等々に基礎づけられた無効な需要との相違は、存在と思惟との相違、現実的対象として私のそとに私にたいして存在するような観念と、私のうちに実存している単なる観念との間の相違である。」〔貨幣〕s. 164, p. 140. 三九二頁——

だからといって、無効な需要は、人間が本来的に生命的無限性を自己のうちに即目的にもっているかぎりで、絶滅することも論理的に不可能である。そして、この生命的自己が、ただ外在化されて単なる欲望的自己としてのみ実存するかぎりでは、そして、この利己的欲望を資本制的な詐欺と瞞着と投機とによって誘発する富が、ただ彼方にのみ巨大に蓄積されているかぎりでは、さらに緊迫したことから、労働者大衆の日常の生活手段が、資本家の私有財産として、敵対的に自分たちの窮迫した最低生活を脅かしているかぎりにおいては、労働者は誰しも、自分の最低生活に不可欠な生活物資にたいする健全な所有欲は、いうまでもなく、さらに、資本制的に誘発されるままに、歪曲された不自然な所有欲を、つぎつぎと追求してゆくほかない必然性におかれていたわけである。そして、この所有欲が実現され満足されるためには、無効の需要であることから有効需要への転化のため、所有欲もまた貨幣欲——国民経済によって作られた真実の唯一の欲望——に転化するほかない必然性にあるわけである。このばあい、市民社会における一市民としては、労働者もまた、本来の人間の欲望は喪失しており、ただ外在化され疎外された方向のみ欲望の自己意識が動いていることに、問題はない。すなわち、マルクスもいうごとく、「すべての情熱と、すべての活動とは、所有欲のもとに消滅しなければならない。労働者は、彼が生きよ

うとする程度だけを所有することが許され、そして所有するために生きようとすることだけを許される」(「欲望、生産および分業」S. 144, p. 119, 三六四頁)というわけである。この所有欲の転化形態としての貨幣欲の疎外状態を、さらに一步すすめて理解するために、マルクスは、「第三手稿」の次の第四断片「貨幣」において分析する。

——「貨幣は、あらゆるものを買うという属性をもつことにより、また、あらゆる対象を手に入れるという属性をもっている点で、すぐれた財産としての対象である。貨幣の属性の普遍性は、その本質が全能だということである。したがって、それは全能の存在として通用する。貨幣は、欲望と対象とのあいだの、人間の生活と生活手段とのあいだの仲介人である。しかし、私のために私の生活を媒介してくれるものは、また私にたいする他人の定有をも私のために媒介してくれるのである。貨幣は私にとっては、いま一人の人間である。」

(「貨幣」S. 161, p. 137, 三八六頁)——

貨幣の媒介性と、この媒介の普遍性について、マルクスはさらに述べている。——「貨幣は、私の願望を觀念から存在へ転化させる。それは、私の願望を、その思惟され觀念され意欲された定有から、その感性的な現実的な定有へ、觀念から生活へ、觀念された存在から現実的存在へ翻訳する。それは、こうした媒介をなすものとして、真に創造的な力なのである」(ibid. s. 164, p. 140, 三九一頁)。「人間として私のできないこと、つまり私の個人的生活力をもってしては不可能なことを、私は貨幣によってなすことができる。だから貨幣は、これらの生活力のおおのを、それがそれ自体でそうでないようなものに、すなわち、その反対物に転化するわけである。」かくして、「貨幣によって私のためになるもの、私が支払いうるもの、すなわち貨幣が買うことのできるもの、それは、貨幣そのものの所有者としてのこの私である。貨幣の力が大きければ、それだけ私の力も大

きい。貨幣の属性は、貨幣所有者としての私の属性であり生活力である」(ibid. s. 162, p. 138. 三八九頁)。——すなわち貨幣は、市民社会に生活する人間にたいして、欲求の主体にたいして、内なるものを外に媒介する。觀念を實在に、無効需要を有効需要に転化し、人間の生活力を社会的実勢力に転化する。しかしながら、外に實在化された一切の社会的実勢力は、ひたすら、その仲介者たる貨幣の量にのみ依存するのであって、内なる人間の生活力を必ずしも反映しない。否むしろ、外と内とは、相反するものであり、顛倒されて反映するのが原則である。したがって、外なるものを内に媒介するときにも、貨幣の役割は同様である。すなわちマルクスも、これを指摘している。

——「私が研究にたいする天職をもっているにしても、そのために貨幣をもっていないとすれば、私は、現実に何ら研究の天職、すなわち効果ある真の天職をもたないわけである。これに反して、私は、実際に何ら研究にたいする天職をもっていないが、その意志とさらに貨幣とをもっているとすれば、私は、研究のための効果ある天職をもっているわけである。人間としての人間、および社会としての人間の社会から由来するのでないところの、觀念を現実へ、現実を単なる一個の觀念へ変えてしまうための、外的な一般的手段および能力としての貨幣は、現実の人間のおよび自然的な生活諸力を全く抽象的觀念へ、したがって不完全性へ、苦悩にみちた妄想へと転化させ、これとともに他方では、現実的な不完全性と妄想とを、實際上では無力な個人の空想のうちに実存しているにすぎない生活力を、現実的な生活力と能力とへ転化させる。だから、この規定からいっても、貨幣は、個的特性をその反対物に逆転させ、それらの諸属性に矛盾した諸属性を付与する個的特性の一般的転倒なのである」(ibid. s. 161-5, p. 140. 三九二頁)——

このように、われわれの欲望的自己意識において、内と外とが、相互に貨幣によって転倒的に媒介されるところに、近代ないし現代のブルジョア社会に生活する個々の市民が自己疎外におちいる桿杆があるのであるが、この貨幣が、普遍的な要素としての諸商品の結晶であり、諸商品交換の唯一の媒介物であるかぎり、かかる自己疎外のための桿杆も、唯一の普遍者として、すなわち具体的一般者として、市民社会のあらゆる部分に、その威力を発揮するほかないであらう。

——「もしも貨幣が、私を人間生活に、社会を私に、私を自然と人間とに結びつける紐帯であるとすれば、貨幣は、すべての諸紐帯の紐帯ではないか！ それは、すべての紐帯をほごいたり結んだりできはしないか！

したがって、それは、また普遍的な縁切り手段でもあるのではないか！ それは、まことに、社会の電気化学的な力である。」(Ibid. s. 163, p. 139, 三九〇頁)——

かくて、欲求の体系としての市民社会において、貨幣が、その具体的一般者として君臨し、諸部分を結合したり分離したり、人間の生活の内と外とを転倒的に翻訳しているとすれば、個々の市民においてだけでなく、市民社会が全体として自己疎外におちこんでいることを、ものがたっているとせねばならない。すなわち、われわれ現実的な市民が、その外在化した欲望の定有から自己反省して、はじめて自己のうちに対象的に見ることできるところの、向自的な生命的自己、人間の生命の人類としての無限性、すなわち人間の種属の本質は、市民社会において、否、市民社会そのものとして、完全に自己喪失しているのである。このような普遍的な自己疎外にたいする貨幣の媒介的役割の普遍性についても、マルクスは明確に述べている。

——「貨幣によるすべての人間のおよび自然的な諸性質の転倒と混淆、不可能事の融合化——貨幣の神秘的な

力——は、人間の種属の本質が、疎外され外在化されつつあり、自分を譲渡しつつあるものとしての、貨幣の本質のなかに横わっている。それは、人類の外在化された能力である。」(Ibid. s. 163, p. 139. 三九〇頁)——すなわち、このようにして、市民社会そのものが、人類種属の歴史的自己疎外の頂点にあるのである。そして市民社会を支配する資本家階級の一切の事柄が、この疎外の状態そのものとすれば、そこに外在化することによって、自己喪失におちいつている賃労働者階級こそは、まさに疎外された人類そのものであり、したがって、歴史的に自己疎外におちいつたかぎりの種属の生命の、近代のないし現代的な表現形態でなければならぬ。

しかも、この賃労働者階級は、かく疎外されている人類としては、向自的に自己の内に生命的無限性を自覚するということは、論理的に可能であるにしても、しかし現実的には不可能にちかいかい。なぜなら、市民社会としての疎外の状態のままに、個々の賃労働者は、資本制的機構によって、そこに具体的普遍として君臨する貨幣の威力によって、彼らの欲望の定有は奔弁されるほかはないからである。ところで、このように疎外された「外在性の巨大な王国」の経済機構は、さらに、その理論的表現によって精神的に防衛されるにいたるのである。

以上、要するに労働者は、たんなる一市民としては、無限の無効需要を自己のうちに実存させている。これを有効需要に転化さすための貨幣を、あるいは、この貨幣を獲得するための財産の何ほども所有していないかぎりでは、この有効需要も、窮迫した最低水準の生活に不可欠な、粗野な単純な、欲望の実現たるにすぎない。しかも、この粗野な単純な欲望を充足するためには、絶対の無所有者であるかぎりでは、自分の生ける労働能力を商品として資本家に譲渡し、そして貨幣の少量を、この「万能の化学薬品」の一粒を、入手するために、労働市場につねに現れいでて実存していなければならぬのである。すなわち賃労働者としては、かれらの所有欲も貨幣

欲も、国民経済学的教説によって説教されるまでもなく、現実につつましく「道徳的」である。かれらが、所有するために生きていることは、事実であるが、しかし、「ただ生きようとする程度だけを所有しよう」としてゐるにすぎない。しかも投機的な誘致によって、かれらの無限の——悪しき無限の——疎外された欲望が、つねに唆かされているところの、「外在性の巨大な王国」としての社会的環境にあつて、このあまりにも「節欲的な、禁欲的な」賃労働者は、いうまでもなく、まったくの経済的な不自由にある、というほかないわけである。ところで、このような経済的不自由にある欲望の人間としての賃労働者が、向自的に自己反省して自由なる自己を、かれらが自らの心の内に求めるとすれば、かれらの心は、いかなる自己意識の構造にあるであらうか。これが前節の最初に掲げておいた問題であつた。そこで今や、われわれは、この労働市場における「単なる商品人間」としての賃労働者の向自有的論理構造の問題にかゝつて、この問題の解決にむかつてすすまねばならない。

さて、「単なる商品人間」は、上述来で明らかにされたごとく、欲望の人間であり、しかも疎外された欲望的人間である。したがつて、「単なる商品人間」の自己意識も、この疎外された欲望からの何らかの自己回復でなければならぬ。とにかく、それは、欲望的自己を自己のうちに対象として定立して、これを意識する自己意識でなければならぬ。このことを確定し、さらに解明するために、『資本論』第四章第三節の叙述を読むと、

——「労働能力が売れないならば、それは労働者にとって何の役にもたたないのであつて、彼は、むしろ自分の労働能力がその生産のために一定分量の生活維持手段を必要としたこと、および、その再生産のために絶えず新たにこれらが必要とすることを、残忍な自然的必然だと感ずるのである。そこで彼は、シスモンディととも発見にする。〈労働能力は、もしそれが売れないならば、無である〉と。」（『資本論』S. 181. 三三四頁）——

すなわち、ヘーゲルの自己意識と同じように、自己の疎外された状態としての商品的實在性の空無性を、その否定性を、最初から知っているかぎりの自己意識を抱きうる可能性を、「単なる商品人間」は、確かにもっているのである。しかしながら同時に、この自己の商品としての労働力が無であるということは、すなわち非有であるということ、他方において、生活手段から現実的に労働者が疎外されているということであり、そして、このことは、労働者およびその家族の社会的生存の否定であり、彼らの死をいみするのである。かくて、賃労働者ももちうるものの、「単なる商品人間」としての自己意識なるものは、じつさいは、このように彼の経済的生活において現実的に限界づけられ制限されているものとしては、向自有固有の自由なる無限性を欠いているといわねばならない。すくなくとも、欲望の人間の否定的自己関係において到達さるべきはずの生命的無限性を、自覚することは不可能である。にもかかわらずマルクスは、賃労働者を「単なる商品人間」として限定したうえで、これを自由なる人格者と呼んでいるのである。したがってマルクスもあきらかに、自由なる人格的自己を自己のうちにおいて見る自己意識的向自有の可能性を、労働市場における「単なる商品人間」に現実的なものとして承認しているとせねばならない。すなわち、つぎのごとく表現している。

——「ここに自由とは、労働者の自由な人格として自分の労働力を自分の商品として処分するという、また他方では、彼の売るべき他の商品をもたず、自分の労働力の実現に必要ないっさいの物象から引きはなされている自由であるという、二重の意味においてである。」(Ibid. S. 176. 三二七—二八頁)——

前の自由は、形式的に法律的な自由を確保するための経済的自由であるが、この労働市場における経済的自由は、後の自由としての日常生活における現実的な経済的不自由によって直接的に裏づけられている。このことに

ついでには、前の節で触れておいたとおりである。ところで、この自由と不自由との相い表裏する経済的矛盾が、いまだ頭わに定立されるにいたらないかぎりでのみ、すなわち、労働力商品の所有者として資本家と相互に平等に対立している関係に現実にあるという一面だけにおいてのみ、われわれも当然ながらマルクスとともに、賃労働者に法律的に自由なる人格を認めねばならないであろう。

しかし、このばあいの賃労働者の自己意識においては、自己のうちにおいて表象として対象化される本質的な自己なるものも、ただ法律的にのみ自由な商品所有者としての人格であるにすぎない。かかる自己意識において、この法的な人格が自己のうちにおいて見られるといっても、それは、具体的に内部知覚されているわけでなく、ただ抽象的に単に表象として定立されているだけのものとしては、観念的な権限として「商品人間」の意識のうち理念的に描かれているにすぎない。このかぎりにおいて「商品人間」に唯一の現実的でありうる自己意識なるものは、たんなる観念的な自由であるほかない。欲望の外的対象として何物も所有せず、ただ労働力を商品として所有するかぎりにおいて、その法律的権限が保証されているといえども、この労働力自体が経済的に保証されていない不自由な最低生活にとつては、かかる法律的自由は、たんに形式であるにすぎない。したがって、「単なる商品人間」は、自己の欲望的定有をば、対象の商品としては勿論のこと、主体的商品すなわち労働力としてにおいても、その法律的自由の保証する観念的無限性においては、実質的に所有しているとは、いえないのである。すなわち、自由の法律的表象を観念的に所有しているにすぎないものとせねばならぬ。かくて、「単なる商品人間」の労働市場における向自有的自己意識なるものは、まさに、たんなる観念的無限性における観念的所有の自由であつて、そのかぎりでは、ヘーゲルの向自有的の論理がそのまま、なお適用しうる領域であるとせねばな

らない。これが「単なる商品人間」の論理構造である。——ただ、この「商品人間」の向自有は、その自己意識性において、ヘーゲルのごとく実在的労働市場から自由疎遠になりうる観念性になく、不自由に接近しているほかない観念性にあるということを、忘るべきでないであろう。

ここに不自由に接近しているというのは、労働市場に外在化している「商品人間」の直接的な定有としての欲望の実存の近接のことであり、この欲望的、近接が、いまだ実現されない商品としての自己の労働力を身体的に所有しているにとどまるというだけでなく、資本家に譲渡されたのち、貨幣を身体的に所有することによって、そこに、この実在的対象との感覚的な関係を現実結んでいても、この実在的な交換過程そのものが、賃労働者の経済的生活の疎外された不自由さの結果であるということである。労働市場という実在的な対象関係のもとにありながら、この関係のなかにある自分の定有的実在性が、自己自身に疎遠であるという自己疎外の事実そのことを、それは指しているのである。すなわち入手した貨幣そのものも、欲望的人間が自己のうちに人間的生命の無限性を見て、かかる生命的自己を内部知覚の対象として打ち立てる自己意識は不可能であって、ただもっぱら、欲望的人間の自己満足が、その外在化の方向に無限に誘い出されるだけの可能性しか、「単なる商品人間」の自己意識にありえない構造を、それは、いみする。すなわち「単なる商品人間」に現実的に可能な唯一の自己意識においては、いまだ向自有的な否定的自己関係は規定的に定立されてい~~ない~~。この否定の否定という自己反省は、たんなる可能性としては欲望的人間に潜在しているけれども、これの未だ顕現する段階にきていない自己意識であるにすぎない。欲望なるものが、このようなものとして、自己意識の最初に現れる形態であることについては、『精神現象学』のヘーゲルの叙述によって見てきたとおりである。

であるからといって、この欲望的定有を自己の外在化とする生命的自己を、反省的に自己のうちに対象化する自己意識が、「単なる商品人間」にないわけではない。しかも、この自己意識は、自己のうちに対象化された自己自身を、その欲望的定有から生命的無限性に向自的に展開せしめるための否定的自己関係そのものの、自己意識でないというのである。要するに、生命的自己にかかる否定的自己関係そのものを、自覚しないかぎりの自己意識であるというのである。そのかぎりにおいて、経済的に疎外されたままに外在化している欲望的自己を、ただそれだけとして肯定的に反省する自己意識であり、疎外のゆえに空虚であり経済的に不自由である欲望の人間の、この直接的な否定的自己関係、すなわち、いまだ向自有でない自己関係から見れば、自己の本質に疎遠な自己意識、観念的な向自有としての向自有である。本質的内容を表現しない外面的な抽象的形式としての観念論的な自己意識である。「単なる商品人間」に現実的に可能な唯一の、このような観念論的にして形式的な向自有的自己意識は、さきに批判的に分析されたいみにおけるヘーゲルの自己意識の観念性そのままでは、ないであうか。

要するに、「商品人間」は、その外在化した定有における欲望の人間として、生命的自己関係の直接性にあるものであるが、その向自的な自己意識としては、この生命的自己の本質と関係のない観念性にあるのである。これを、さらに言いかえれば、経済的に不自由なるがゆえに欲望の人間として疎外されているにかかわらず、法律的に自由を確保する自己意識は、この疎外からの生命的無限性への自己回復ということに、無関心であるということになる。すなわち、経済的に不自由であるにかかわらず法律的に自由である。したがって逆に、法律的に自由であるかぎりにおいては、自己の経済的不自由に無関心でありうる。このことを、さらに詮じつめれば、「単なる商品人間」という一個同一のものにおいて、経済的不自由と法律的自由とが弁証法的に統一されず、ただ差

別される両面として存在し、一方から見れば、経済的不自由であり、他方から見なせば、法律的に自由である、という論理構造にあるにすぎないことを、いみしているのである。すなわち法律的自由を自覚する場面が、経済的不自由を自覚する場面と、一個同一の賃労働者において異っているのである。このことを、自己意識の論理構造にもとづいて言いかえるならば、法律的自由を自覚する一方の自己意識は、「単なる商品人間」が、自己において自由なる人格的自己を見ることができ、経済的不自由を自覚する他方の自己意識も、自己において自由なる生命の無限性を見なければならぬわけであるが、かく見られるものが相互に差異を示すということは、その見られる場所としての自己においてが異っているからであるとせねばなるまい。そして、「単なる商品人間」に现实的に可能な、したがって必然的な唯一の自己意識形態としては、法律の無限性の形式的自由を、すなわち単なる観念的自己を有して有らしむる場所が、単なる意識、生命的自己に無関心な自己意識であったというのが、上述の要旨である。ここに、抽象的自己意識をもって現実の人間の本質的実体であるとするヘーゲル哲学の立場を、そのままにして見る事ができるであろう。

七、賃労働者の「単なる商品人間」としてのヘーゲルの自己意識

「単なる商品人間」として限定された現実的賃労働者は、この限定のもとにおいて、その外在化した定有的実在性は欲望の人間であるが、それにもかかわらず、その否定性の向自有的な自己関係は、ヘーゲル的な自己意識によって理解されうる論理構造にある、とするのが今までの分析的吟味の全内容であった。しかしヘーゲルにおいても、マルクスあるいはフォイエルバッハから批判的に見るかぎりでは抽象的な亡霊にすぎなかつた自己意識は、

具体的に現実的人間に結びつき、その生きた魂であったのである。したがって、「単なる商品人間」の自由なる法的人格への自己意識が、ヘーゲルの観念性にあるというだけでは、それが感性的な欲望の人間とのあいだに、いかなる必然的結合があるかの分析なくしては、吟味はなお不十分さを残しているというほかはない。

そこで、この欲望的な感性的な定有とかの思惟的な観念的な向自有との両項の契機が、相互に如何に内的に統一されているかの問題に入らなくては、まず、これらの両項の結合さるべき外的条件から説明してゆくとすれば、客観的に実在する労働市場そのものにかかわってゆくことになるであろう。そうすると、労働市場における現実の労働力売買の関係においては、実際のところ、賃労働者は、自己の労働力が売られているかぎりでは、さきに述べたところの「生活手段から疎外されているという自由」を、すなわち、この経済的不自由を忘れがちであり、あるいは全く忘れている事実を、われわれは見いだすのである。労働者のみでなく資本家もまた、このことを忘れてるのである。「労働能力が無である」ときに、労働者にたいしてのみ死が直面するだけでなく、資本家も資本家として存在しえなくなるのであるが、資本家は、このことを忘れがちである。このことは現実に、いかなる事態に由来する事柄であるのであろうか。それは、労働市場が客観的事実として与えられ、そして、この事実が、「外在性の王国」の恒久的な自然事実と見えるかぎりにおいてでなければならぬ。この労働市場の永続性についてマルクスは述べている。

——「労働力の所有者は死を免れない。だから、市場における彼の出現が、——これは貨幣の資本への継続的転化が前提するところのものであるが、——継続的現象でありうるためには、へ各々の生きた個体が自らを不滅ならしめるのと同じように、生殖によって（ペティ）労働力の販売者が自らを不滅ならしめねばならぬ。消

耗と死亡とによって市場から奪いさられた労働力は、すくなくとも、同数の新たな労働力によって、たえず新たに補充されねばならぬ。だから、労働力の生産に必要な生活手段の総額は、補充員すなわち労働者の子供たちの、生活手段を含むのであって、かようにして、この独自の商品所有者の種属が、商品市場において自らを不滅ならしめているのである。」(ibid. s. 179. III—IV頁)——

労働者が、賃労働者として資本制社会に生活することを不動の前提としているかぎり、彼は、労働市場から、したがって生活手段から、疎外されるという経済的不自由を、すなわち失業するということを、偶然的な私事として諦めるにいたる理由は、ここにある。すなわち、労働力商品としての、賃銀貨幣としての、自己の欲望的定有そのものからの自己否定を、「外在性の王国」の必然性としての価値法則のまえには、意識はするが、しかし、それを運命的なこととして諦めるほかないのである。なぜなら、労働市場に集まる「人間商品」は自分のほかに無数にあり、労働市場そのものに何らの変化をみず、資本制的再生産は続行されているし、ブルジョア社会は依然として「外在性の王国」として堅固であるからである。しかしながら、それにもかかわらず、この「商品人間」が、その欲望的定有を否定されていることを、意識するということは、それ自体で、向自有的な自己意識の論理構造にあるのでないか。一人の労働者の失職は、その家族の飢えをいみする。このことの主体的反省は、労働市場におけるかぎりの利己的な欲望から自己否定的に、家族全体の生命的存在に自己関係することでないか。

資本制的生産は、機械を工場に採用した当初から、「家族の全員を労働市場に投げだすことによって、男子の労働力の価値を、彼の家族の全員のあいだに分割する」ことによって「資本家と労働者とのあいだの契約を、根本的に変革した」(ibid. s. 114-5. 六四四—五頁)のである。また他方において、婦人労働、児童労働にたいする工

場立法においても、それらの労働の自由は保証され、労働者の家庭生活に变革をうながすにいたつたのである。すなわち、婦人および児童の家庭から解放によつて、男子および両親の権力は、その経済的基礎をうしなう傾向を生じるにいたるのである。しかし、この婦人および児童を労働の自由ということと、家庭からの解放ということとは、法律的なことがらであつて、経済的には、労働力の価値が低下せしめられたことによるところの、家族全体の生命維持のための已むをえざる処置にすぎない。いかえれば、それ自体「商品人間」の向自有的な生命的自己関係である。したがつて賃労働者が、自己の家庭生活を実体的根拠として反省する、という自己意識をもつことのために、かならずしも彼が失業することを条件としていない。それにしても、彼が失業したことによつて、現役労働者軍からその予備軍に編入されたかぎりにおいては、この産業予備軍全体の人間の生命を、自分の意識のうちに対象化するための、實在的可能性におかれたということを、いみするであろう。資本の有機的構成が高まる過程において「労働者は、間断なく吸引されては反撥され、投げだされては取りいれられる。そして、そのつど被傭労働者の性、年齢、および熟練のうゑに変化が起り」(Ibid. s. 477. 七三〇頁)、そして、これらのすべての変化の結果として、過剰労働人口、産業予備軍が形成されるということについては、『資本論』の叙述によるまでもなく、周知のことからである。労働者階級そのものの資本制社会におけるこのような運命を、個々の労働者が、失業すると否にかかわらず、それぞれの自己意識の内的対象とするにいたるとすれば、この社会連帶的な自己意識は、自分たちの階級的な生命の存続にたいして、自分たちの欲望的定有の自己否定から向自的に自己関係した、ということになるわけである。

ところで、賃労働者のこのような階級的な自己意識の実体としての、生命的な自己関係の事実は、資本家の立

場からすれば、まさに正反対の階級的自己意識の対象となる。なぜなら、この同一の事実は、労働市場の恒久的永続性として、資本の価値増殖を、したがって、資本家たちの利潤追求欲を、恒常的に保証しているからである。しかも産業予備軍なるものは資本蓄積の結果であるだけでなく、その条件であるものとしては、すなわち、その再生産過程における景気循環において、恐慌期および沈滞期には大量的に吐きだし、昂揚期には大量的に吸引しうるところの伸縮自在の労働人口であるかぎりのものとしては、資本家階級は、資本蓄積の目的のための不可欠な手段にたいして、目的意識的に合理的な対策を講ぜざるをえないからである。このことは、「資本家の側における、外在化された人間的な欲望とその充足手段の増加ないし精巧化とが、賃労働者の側において、無欲望と無手段とを強力的に産出してゆく」というさきに述べておいたところのものであるが、この疎外の事実は、国民経済学者ないし経験的事業家に、如何に反映し如何に理論化されているかについて、マルクスは、「第三手稿」の第三断片において、詳細に論述している。すなわち、

——「人間の欲望の喪失による無感覚と、純粹に抽象的な機械的運動とを、生活内容とする窮迫この上ない最低水準が、国民経済学的算出の一般的水準にされているため、国民経済学者にとっては、この抽象的な欲望から超え出るものは、たとい、それが受動的的精神としてであろうと、また活動的発現としてであろうと、すべては贅沢に見える。労働者の贅沢は、如何なるものでも排斥すべきものとしか見えない」。かくて、「富の科学であるこの国民経済学は、だから同時に、禁欲の、困窮の、節約の科学であり、また実際に、人間の清潔な空気がか身体の運動とかにたいする欲望をさえ、節約するにいたっている。この驚くべき勤勉の科学は、同時に禁欲の科学であり、そして、その真実の理想は、禁欲的な、しかし利殖に汲々たる守銭奴と、禁欲的な、しか

し生産的な奴隷とである。その道徳的理想は、貯金箱に給料の一部をもつてくる労働者である。」〔欲望、生産および分業〕(S. 143, p. 118, 三六二—三頁)——

さらに、この節欲の、禁欲の道徳的イデオロギーは、種々なる学説の形態に固定化されるにいたるわけであるが、その一つの学説においては、資本家階級ないし国民経済学者の、人類の生命的無限性にたいする厚顔無恥を曝け出すことになる。

——「国民経済学の原理としての無欲望は、その人口論に最も輝かしく示されている。人間があまりにも多すぎる。人間の存在さえ全くの贅沢である。そして、もしも労働者が〈道徳的〉であるならば、彼は生殖についても節約的なのであらう。——ミルは性的関係において控え目であることを示した人々にたいして、公然の称讃を、結婚という無生産的なことを敢てした人々にたいして、公然の叱責を、提案している。これは、禁欲の道徳論でないか。かくては、人間の生産は、公然たる窮乏として現れるほかはな。」(ibid. S. 146, p. 121, 三六七頁)。というのも、「生産が富者にたいしてもつ意味は、それが貧者にたいしてもつ意味において、判然と現れる」からだけのことにはすぎない。「上に向つては、その発現は、つねに微妙で内密で曖昧であり外観であるが、下に向つては、粗野で露骨で卒直であり、本質である」(ibid. S. 146, p. 122, 三六七頁)からである。にもかかわらず現実の関係においては、「労働者の下等な欲望こそが、富者の高尚な欲望よりも、遙かに大きな資本家的利得の源泉なのである」(ibid. S. 146, p. 122, 三六八頁)。かくて「また工業は、欲望の洗練化にたいして投機するように、粗野な欲望にたいしても、また欲望の人為的につくられた粗野にたいしても、投機する。だから工業の真実の精神は、自己麻醉であり、欲望のこの外見的な充足、この文明は、欲望の粗野な野蠻状態

の内部にある。だから、イギリスの居酒屋は私有財産の象徴的な表現である。居酒屋の贅沢は、人間にたいする工業上の奢侈および富の真実の關係を示してゐる。」(ibid. s. 147, p. 122. 三六八頁)

このように労働者だけでなく資本家にあつても、彼らの人間的欲望は疎外されて、その充足のための自己意識は、相互に対立して背馳しているのであるが、しかし、マルクスもいつているように、——労働市場において、資本家と労働者とを、それぞれ商品所有者として、それぞれ自由な人格者として、平等な關係において結合している。そしてこのように「結びつける唯一の力は、彼等の自利、彼らの特殊便益、彼等の私的利益の力である。そして、かように各人が自分のことだけを構つて誰も他人のことを構わないがゆゑにこそ、すべての人が、事物の予定調和の結果として、または全能な摂理のおかげによって、彼等の相互の便益、共同の利益、全体の利益となることのみを行うのである。」(『資本論』s. 184. 三二八頁)——すなわち、このようなベンタム的な功利主義によって、資本家と賃労働者とは、彼らの個別的意志の相互承認のうゑでの一つの共通の意志を設定し、これの法的表現を契約という行為に見いだすのである。

ところで、このばあい、賃労働者の感覺的な欲望は、自己の生命的無限性の疎外され外在化された近代ブルジョア社会の市民的欲望そのものである。したがつて賃労働者といへども、資本家とまったく同じく、そして資本家とともに、その個人主義的な私的利益を追求する行為において、それが社会全体の利益になるといふ予定調和を信ずるかぎり、自由なる近代的な法的な人格を、觀念的に自己の人間の本質と考えるほかはない。かかる予定調和という場所において限定せられる人間の本質は、要するに、市民的自己のほかの何ものでもありえなかつたはずである。ここに、「單なる商品人間」において、かれが一市民にすぎなかつたかぎり、かれの感覺的な欲

望的定有と、かれのヘーゲルの観念的な向、自有的自己意識とが、結合せねばならない外的必然性があるのである。しかしながら、この現実的な結合における内的な統一原理は、論理的に如何に引きださるべきであろうか。それは当然ながら、賃労働者もまた、資本家と平等の立場にあつて私利を追求している自由なる一市民として、労働市場において行為しているという事柄から、この事柄において、分析的に引きだすはかばかはずである。

賃労働者は、「単なる商品人間」として、ただ単に労働市場に欲望的定有をもっているのではない。この欲望的定有において、自らのブルジョアの個人主義的自由を追求するところの行為的人間として実存しているはずである。たんに欲望の間であるがゆえに、感性的対象に对象的に關係しているだけのものでなくて、行為的人間として、その欲望的行為によって感性的に実在的な対象に關係し、そして自己の私利を追求せんとする欲求をもっている欲望の間である。「単なる商品人間」の現実的な定有の実在性は、肉体的に所有された商品としての労働力であり、賃銀としての貨幣である。しかも、労働力と貨幣との交換という定有形態のメタモルフォーゼは、客観的な对象的に存在する關係であつてみれば、「単なる商品人間」という抽象性にかかわらず、賃労働者が、交換という現実的行為において、自己の感性的存在を、自己の欲望的意識を、直接的に確証するところの行為的自己であることには、問題はないであろう。だが、それにしても、行為の間は、つねに自己の本質的内容を行為的に実現することにおいてのみ、真実に行為的であるとされねばならない。そこで、今ここに、このように向自有的な本質的内容を外に実現してゆくことを限定というならば、行為的自己は、行為的に自己限定するものでなければならぬのである。ところで「単なる商品人間」が、自己のかかる行為において、自己の本質的自己を法的人格としてだけしか反省しえないとすれば、これは真実の行為的自己限定であると言いうるのであろう。

か。このことの吟味のために、西田哲学におけるこの「行為的自己限定」なる概念を、ここに試みに手段的に借用して見るならば、

——「行為的自己というものは、なお見られた自己の意味をもったものである。絶対無の自覚においては、行為的自己というごときものも失われねばならない。ここでは、ただ事実が事実自身を限定する、というべきである。行為的限定は、ここでは、ただ感官的限定というごとき意味をもつてくるのである。かかる意味においては、われわれの自覚と考えられるものは、絶対に非合理的なるものの合理化と考えることができ、自己の底には絶対に非合理的なものがあると考えることもできる。事実が事実自身を限定するという意味において、感官的なるところに真の自己があるとすれば、かく考えざるをえざるべく、そのノエシスの方向に行為というものが考えられ、そのノエマ的方向に表現というものが考えられるのである。」——

すなわち、労働市場における賃労働者が、自己の労働力を資本家に販売するという行為において、たとえ、それが自主的な、自由にして主体的な行為であるとしても、自己の定有的実在性としては、客観的な価値法則に貫徹された事実的限定における単に外面的な感官的限定たるにすぎない。この感官的限定をする自己の底にあるところの、実在的な労働市場そのものは、絶対に非合理的なものとしてしか「単なる商品人間」には反映せず、だからといって、この非合理的なものを合理化するという行為は、否、その意志さえも彼は抱いていないはずである。いいかえれば、彼は市場的事実の自己限定をつらぬく客観的法則を、いまだ自己の反省内容とするだけの向自有的な自己関係を、自己の意識のうちにさえ規定的に定立しうるまでには、とうてい、なりえないかぎりのものである。自己の労働力を販売するという感性的行為は、たしかに意志的自己の働きであるに相違ないとしても、

この市場的事実の自己限定をば、自らの意志内容として受容する客観性を、これまた、とうてい、もちえないところの主観性にあるはずである。すなわち、それは、市場の変動の皮相的現象にたいして、外から単に欲望的に接触しているだけにすぎないのである。要するに客観的事実に外在化した偶然的な欲望の自己の定有的実在を、たんに自己の意識に対立する外的対象として、感性的直観の対象として、所有しているにすぎず、しかも、いまだ客観的な行為的な場所においてではなく、たんに主観的な抽象的意識としての場所において、所有しているにすぎないのである。

そのかぎりで、「単なる商品人間」の向自有的な否定的自己関係は、自己の感性的定有からの、たんに意識的であるだけの人間の本質の回復にすぎず、そこには、この自己意識の実体としての生命的自己関係にたいする向自有的把握は、まったく棄て去られて関心の外にあるというほかはない。したがって、感性的に欲望的な人間としては、対象的に外在化されながら、その抽象的な自己意識のうちにおいてのみ、ただ観念的な自由を確保しているにすぎないわけである。しかも、これこそが、労働市場における賃労働者の法律的人格の形式的自由であったし、また、ここに、ヘーゲルの自覚の論理的規定が、そのままに適用しうる理由のあったということについては、前述しておいた。すなわち、「単なる商品人間」の否定的自己関係は、けっして行為的の自己の行為的な自己限定ではなくて、ヘーゲル的に抽象的な単なる意識的の自己の自己限定にすぎなかったのである。ただ異なるところは、この意識的の自己の外在化における定有的実在性が、ヘーゲルにあつては、たんに思惟された感性、すなわち感覚の表象であつたにたいし、「単なる商品人間」においては、現実的な感官によって対象的に確証されるところの、生きた欲求的感觉であるということである。そのかぎりで、その外在化においては行為的でありう

るが、しかし、向自有的自己としては単に意識的でしかないゆえに、行為的自己の行為的限定は、そこに見ることができないとせねばならないというわけである。

ところでマルクスは、ヘーゲルの哲学そのものを行為的とし、その理由を、定有的実在からの向自有的な止揚の論理的な働きそのものにおき、この論理の重要性を指摘し自らも継承していることについては、前述しておいたところであるが、しかし、このヘーゲルの哲学的行為なるものは、その感性的契機の仮象的空無性のゆえに、マルクスは、これを抽象的であると批判したのであった。そのかぎりでは、「単なる商品人間」の観念的な向自有的自己意識の動きも、抽象的には行為的であると、彼も規定したはずであることに問題はないであろう。しかしながら、およそ行為なるものが、観念的でなく現実的に具体的であるためには、マルクスにおいても、西田博士においても、感性的な自己限定でなければならなかったのである。にもかかわらず、ヘーゲルの哲学的行為においては、その定有的質的規定性が、フイエエルバッハの批難にまつまでもなく、感性的限定でなかったがゆえにしたがって、この仮象的感覚という他のものにおいて、純粹思惟は、自己を喪失することなく、「他のものもの」とにおいて自己自身でありうる」ものであったというわけである。向自有的自己意識についてのこのようなヘーゲル的な規定を、マルクスが警戒したことについても前述（本稿第二節）したところであるが、それは、行為的、自己の感性的な自己限定であるかぎりでは、「他のものにおいて自己自身に安住する」ことは不可能であることからの、マルクスの批判であったと、われわれは、いまここに悟らねばならないであろう。むしろ、「他のものにおいては必ず自己を喪失する」とするところに、マルクスの自己疎外の規定があると、考えねならないのである。

このようにして、「単なる商品人間」のばあいにしても、他のものとしての自己の商品的実在性において、自己意識的な自己自身は完全に喪失しているかぎりで、したがって、欲望的存在だけの人間になっているかぎりで、この疎外された人間が、対象的な物としての商品になっているのである。ただ、この事物化した「人間商品」を、自己の商品的実在性として、すなわち、自己のものとして所有するものは、たんなる市民の人間としては、観念的な意識的自己とならざるをえない。なるほど事実としては、「単なる商品人間」も自己の**実在的商品**としての労働力をば、**身体的に所有している**。しかし、**身体的に自己の商品的実在性を止揚する**という実践的行為は、「単なる商品人間」には不可能である。自己の商品労働力を身体的に所有しているかぎりでは、ただ外在化の行為でしかなく、しかし、この外在化からの向自有的自覚としては、行為的でない**非感性的**、**非実践的な抽象的意識**、すなわち、たんなるブルジョアの意識という場所において、それを観念的に所有しているにすぎないのである。そして、このことこそが、あたかも「単なる商品人間」の論理構造であろう。とするならば、その疎外的定有から回復の運動としては、さきに指摘しておいたとおりのヘーゲルの向自有と本質的に一致しているわけである。

このようなものとして、「単なる商品人間」の論理構造においては、**真実の自己矛盾**というものはないと、いなければならない。ただ、感性的実在と観念的自己との、**対象と意識との、感官と思维との、相互の差別が**、ここにあるだけである。したがって、これら相互間の対立ということも、外見的であって、差別を対立に転化せしむる同一性の論理的契機が、欠けているとせねばならないこと、これまた前節において述べておいたとおりであろう。いかえれば、「単なる商品人間」は、一面、商品として見れば、感性的な具体的事物であるが、他面、人間として見れば、抽象的な思维としての自己意識である、といえるにすぎない。自己意識としては法律的に

自由であるが、外在化した商品としては経済的に不自由である、というだけのことである。ここには、外的反省による差別関係しかなく、外在化した「人間商品」としては、自己意識的な「商品人間」であることに無関心であり、また、この逆に、自己意識的人間としては、自己の商品的定有に無関心でありうる。したがって、労働市場における「単なる商品人間」の自己疎外の事実も、この自己疎外が論理的に自己矛盾の外に現出した姿であると規定すべきであるにしても、「単なる商品人間」であるかぎりの賃労働者そのものうちには、この自己疎外の事實は、われわれ第三者にたいして、矛盾の潜在を予測すべき根拠にはなりえないはずである。

しかしながら、現実的賃労働者が労働市場において現実的に自己疎外に陥っているかぎりでは、この現実的賃労働者のうちに自己矛盾が潜在していなければならぬはずである。とするならば、この潜在的な自己矛盾の顕現するのは、賃労働者自身の行為的自覚においてでなければならず、その抽象的な自己意識においてでは、あつてはならない。賃労働者が自己の内在的矛盾を行為的に自覚するというこの、賃労働者の行為的な自己限定とは、賃労働者に固有の生命的活動としての労働的行為における自己限定でなければならぬ。このことは、しかし、彼が労働市場において経済的に不自由なることの自覚と無関係ではないであろう。否、経済的に不自由なるがゆえに、自己の労働力を商品として資本家に譲渡したのである。そして、この譲渡された労働力の実現が、彼の生産的労働である。とすれば、労働市場において既に始まる賃労働者の行為的な自己限定なるものは、欲望的人間から自己の生命的無限性へと、否定的に自己関係する方向において、経済的に不自由でない本来的自己を自己のうちに対象化することではなければならぬ。いかえれば、この本来的自己を自己のうちにおいて自己そのものと見る自覚、すなわち向自有的自己意識のことではなければならぬのである。そうすると、賃労働者は、労働市場に

「おけるかぎりの『単なる商品人間』としても、法的人格の自由を自己意識する観念的な向自有的反省をするほかに、ここに、いま一つの向自有的自己意識をなしうる実在的可能性をもっている、ということになるわけである。

このことは要するに、賃労働者は、労働市場において、単に形式的な法律的自由に甘んずるか、それとも、実在的な経済的不自由をあえて扱ふかの、相互に差別された二者において扱一すべき岐路に立っているということにもなる。しかしながら、本稿の最初において問題にしたところで、この形式的な法律的自由なるものが、そもそも賃労働者をして奴隷に転化せしめないための不可欠の条件ではあつたかぎりのものとしては、どこまでも確保すべき観念的原理でなければならぬものである。いいかえれば、それは、観念的原理をもつた現実的な行為のための条件でなければならぬ。とするならば、同じく観念的に、自己の生命的無限性を自覚的に回復せんとする他の向自有的な思维の運動の出発点としての、経済的不自由と、対等の論理的価値をもっているとせねばならないことになる。このようにして、法律的に観念的な自由か、経済的に現実的な不自由か、の岐路ということも、ともに現実の同一の行為的場面における現実的な二つの差別された異なる路であると、いわねばならないであろう。そして、この二つの相い反する方向の路を、一個の現実の賃労働者が、同時に行為的に体験しているかぎりで、彼は、たんなる二者扱一でないところの矛盾した岐路に立っているといえるわけである。いいかえれば、彼は、二つの相互に対立する方向に、同時にすすむ実在的可能性ないし必然性にあるのであり、そのかぎりでは、自己矛盾を体験しているわけである。なぜならば、このばあい、法律的自由と経済的不自由とは、まえに述べたばあいと異って、いまや、相互に無関心な差別の關係にあるのではなくて、同一性における差別の關係として、対立の關係にあり、しかも、これらの対立する両方向が、相互に排除する關係を自己の同一性において見る

かぎりにおいては、それは、矛盾の関係にある、とすべきであるからである。

かくて賃労働者は、現実の労働市場において、この自己矛盾をつねに体験しているわけであるが、しかし、この自己矛盾を、たんに直観するだけで、いまだ、それを行為的に自己のうちに自己限定するにいたらないかぎりでは、彼の自己意識は、この行為的に体験され直観されている実在的矛盾を、ただ観念として反省的に定立しているだけの抽象性にあるものとして、この実在的矛盾にたいして、なお疎遠なるものとするほかないであろう。しかしながら、このばあい、この行為的直観は、もともと、即自的に実在的矛盾を内蔵しているかぎりのものとしては、やがて行為的にも向自的に自己限定しうる実在的可能性にあるものと、せねばならない。そのかぎりにおいて、この行為的直観は、徹頭徹尾、行為的でありうるものとして、また実践的直観とよびうるものである。

しかも、かかる実践的直観からの行為的な向自的自己関係へのこの可能性は、また、マルクスの向自有が、実在性と観念性との単に観念のうちにおける止揚というだけの、否定的自己関係にあるのではなく、逆に感性的な外的実在にたいして主観的な観念が自己否定的に自己を止揚してゆく、という真の否定的自己関係にある点で、ヘーゲルの向自有の観念性を克服しうる可能性でもある。そのいみでまた、この可能性を現実化するためには、しかし賃労働者は、労働市場の形式的自由の観念性を、ひとたびは棄てて、経済的不自由そのものとしての自己活動的な向自有にある「労働人間」に、転化せねばならぬという必然性にあることを、いみするのである。いいかえれば、賃労働者が労働市場にあって単なる法的人格の自由を自己意識するだけでなく、その経済的不自由との自己矛盾の自覚において、真実の自己意識の人間になるためには、実際の問題としては、ひとたびは法律的自由を棄てて、労働市場から去り、資本家の工場の門をくぐるという行為的な自己限定が、媒介的に前提されなけ

ればならない、というのである。このことについて、マルクスは『資本論』において、第五章以下の生産過程の叙述にはいる直前の第四章第三節を終るにたあつて、つぎのごとく叙べている。

——「この単純流通あるいは商品交換の部面から袂別するにさいして、わが登場人物たちの相貌は、すでに幾らか変つてゐるように思われる。さきの貨幣所有者は、資本家として先きに立ち、労働力所有者は、資本家のための労働者として、その後につづく。前者は、意味ありげに作り笑いをしながら、業務一途に。後者は、あたかも自分自身の皮を売り渡してしまつて、いまや鞣皮にされること以外には、なにも期待できない者のように、泫々ながらおすおすと。」(ibid. s. 184. 三二八頁)——

賃労働者が、自己の労働力を譲渡してしまつて、「天賦人權の樂園」としての労働市場から、いよいよ資本家の管理下にある生産過程にはいつていくにさいし、彼が不安な顔つきをせざるをえないのは、彼自身には、いまでも無自覚的な実践的直観の対象にすぎないでいたところの潜在的な自己矛盾が、自己意識の内容として顕わに、しかも規定的に定立されるにいたり、したがつてまた、法律的な形式的自由を労働市場に棄ててしまつたかぎりでは、生産過程において労働する自己が、奴隷でしかなくことに直面するにいたつたことを、いみじているのではないであらうか。もし、そうだとすれば、賃労働者の流通過程における自己疎外の事実の實體的根拠としての内在的自己矛盾は、資本家の工場における彼の生産的な労働の過程に横わつてゐる、と推定されうるかのごとくである。「単なる商品人間」に現出する自己疎外は、その根拠としての自己矛盾を、はたして生産過程において労働している人間のうちに、もつかどうか。この吟味のためには、われわれは、生産過程におけるかぎりの現実的賃労働者を、われわれの研究的意識において、抽象的に対象として定立し、そして、この「単なる労働人間」と

しての賃労働者の論理構造をば、分析的に見てゆかねばならないであろう。ところで、この「単なる労働人間」の向自有的論理構造を分析的に解明してくれたものが、マルクスの四四年の『経哲手稿』における、その「手稿第一」の「疎外された労働」なる体系的な断片である。